

# はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、国際協力に関する知識の普及と理解の推進、海外と国内の課題を繋げて考えられる人材、社会課題の解決を目指す人材の育成を目指し、開発教育・国際理解教育を推進することを使命の一つとしております。

教育委員会や教員のみなさま、あるいは自治体、NGO等のみなさまと連携しながら、① JICAの海外での協力現場における「知見の還元」、②地球規模課題への取組を紹介し「考える機会の提供」、③地域の課題と地球規模の課題を結び付け、その解決のために行動する児童生徒を育てていただくための「橋渡し役」となる、の3点に重点を置き、「持続可能な社会づくりの担い手を育てる」国際理解教育・開発教育の支援に取り組んでいます。

学校教育の現場で次代を担う児童生徒の教育に携わり、国際理解教育・開発教育に関心を持つ教員のみなさまを対象として、教師海外研修を実施しています。教員の方々に実際に開発途上国を訪問いただき、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深めていただき、その成果を、学校現場での授業実践等を通じて、教育活動に役立ててもらうことを目的とし、約60年にわたり継続して実施しています。

今年度は4年ぶりに海外研修が実現し、ザンビア・パラグアイの2コースに分かれ、「教育」「貧困」「保健」など、さまざまな切り口で協力隊の活動現場、現地で活動する団体などを訪問しました。約10日間の海外研修の中で色々な人と出会い、交流することで、「国際協力とは何か」「幸せとは何か」「物事を自分の尺度で測ってしまっていないか」など、改めて考えるきっかけとなりました。

JICA 東京センター所管地域である、東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県から22名の教員のみなさまが本年度の教師海外研修に参加され、研修の成果を活用した授業を実践しています。本報告書は、今年度の研修の概要及び参加者の勤務校における授業実践の実例をまとめたものです。教育現場の第一線で日々生徒たちと向き合っている教員の方々が、それぞれの教育現場で実践を行っていただいたことは大きな励みとするところです。これらを通じて、持続可能な社会実現への生徒たちの理解が深まり、周りの方々にも波及していくような好循環が生まれることを期待しています。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた各教育委員会並びに関係諸団体みなさまに感謝を申し上げますとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2024年3月

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京センター

所長 田中 泉

# 目 次

はじめに	1
1. 参加者一覧	3
2. 教師海外研修とは	4
3. 派遣前研修	6
4. 海外研修（ザンビア）	8
5. 海外研修（パラグアイ）	15
6. 派遣後研修	21
7. 授業実践	22
8. 授業実践報告会	64
9. 総括研修	66
10. 研修参加者より	68
11. 研修を終えて	74
12. JICA 開発教育教材案内	75
おわりに	77

# 1 参加者一覧

## ザンビアコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科
梅村 唯斗	群馬	高崎市立矢中中学校	社会
遠藤 大輔	東京	都立板橋有徳高等学校	英語
岡田 紘明	千葉	市川市立大町小学校	全教科
岡野 有為	千葉	千葉大学教育学部附属小学校	全教科（帰国学級）
五ノ井 ゆかり	埼玉	県立入間わかかさ高等特別支援学校	外国語 流通サービス 総合道徳等
澤野 裕香	埼玉	和光市立北原小学校	音楽、家庭科
玉井 彩郁	長野	中野市立高社中学校	英語
中村 太郎	千葉	県立国府台高等学校	地理歴史・公民
藤井 美奈子	長野	長野市立大岡中学校	理科
水野 修	東京	和洋九段女子中学校・高等学校	社会・地理歴史・公民
宮田 千尋	埼玉	県立上尾かしの木特別支援学校	全教科
渡邊 千恵	埼玉	県立所沢西高等学校	国語

## パラグアイコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科
有本 眞実	新潟	佐渡市立河崎小学校	全教科
植木 凡子	東京	白百合学園小学校	図画工作
大平 要	東京	青梅市立第三中学校	音楽
大日方 あずみ	長野	富士見町立境小学校	全教科
笠原 香織	群馬	太田市立沢野小学校	国語
下井 慈	長野	根羽村立義務教育学校根羽学園	国語 教務主任
富澤 喜一	東京	都立荒川工科高等学校 定時制課程	地理歴史・公民科(公共、現代社会、日本史 A)
水澤 真也	新潟	聖籠町立山倉小学校	理科
森岡 浩希	東京	目白研心中学校・高等学校	英語
吉田 裕文	群馬	高崎市立八幡小学校	特別支援学級担任兼主任 特別支援教育コーディネーター

## アドバイザー

氏名	所属
佐藤 真久	東京都市大学 教授 (JICA 東京 教師海外研修アドバイザー)
白水 始	国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 副部長・総括研究官
畑 文子	教育環境デザイン研究所 研究員

## JICA 運営

氏名	所属
八星 真里子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課
三井 久美子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課
諸橋 郁哉	JICA 東京センター 学校教育アドバイザー (埼玉県教育委員会より派遣)
高橋 雪子	埼玉県国際協力推進員
宮田 峻弥	群馬県国際協力推進員 (～2023年10月)
佐々塚 麻里菜	群馬県国際協力推進員 (2023年10月～)
中村 史	新潟県国際協力推進員
木島 史暁	長野県国際協力推進員 (～2024年1月)
ムーア 美紀	長野県国際協力推進員 (2023年12月～)
岩沢 久美子	千葉県国際協力推進員 (2023年7月～)

# 2

## 教師海外研修とは

### 教師海外研修の歴史

1965年、日系移住地に高校教員を送ることから始まり、現在は小学校・中学校・高校・特別支援学校の先生を対象に実施しています。一般教員コース・行政主幹コース（教育委員会指導主事以上、教頭、校長等）あわせて、これまでに全国から約3,400名の教員を開発途上国の現場に派遣しています（2023年現在）



### 目的

1. 国際理解教育 / 開発教育の実践と推進に意欲のある教員が、本研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の意義、またSDGs（持続可能な社会）について理解を深め、継続的に国際理解教育 / 開発教育の実践を行う。
2. 研修参加者が本研修の成果を活用し、各地域で学校教育関係者等への国際理解教育 / 開発教育の理解促進を図り、情報を共有する。



### 本研修参加者に期待する能力開発

- ① 国際理解・開発教育の必要性を理解し、推進する力。
- ② 開発途上国が置かれている現状、国際協力の現場で起きている現状を理解し、学び続ける力。
- ③ 開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について理解し、探し続ける力。
- ④ 国際協力の必要性及びJICAの概要を理解し、説明する力。
- ⑤ 上項①～④のを踏まえ、授業・教育活動を計画し、実践する力。またその実践による児童生徒の学びを考察し、次につなげていく力、周りに広めていく力。

### 主催

独立行政法人 国際協力機構 東京センター（JICA 東京）

### 後援

外務省、文部科学省、東京都教育委員会、千葉県教育委員会、埼玉県教育委員会、群馬県教育委員会、新潟県教育委員会、長野県教育委員会、千葉市教育委員会、新潟市教育委員会、一般財団法人 東京私立中学高等学校協会、一般社団法人 千葉県私立中学高等学校協会、一般社団法人 埼玉県私立中学高等学校協会、群馬県私立小・中・高等学校協会、新潟県私立中学高等学校協会、公益社団法人 長野県私学教育協会

### 参加人数

22名

## 研修の流れ (2023年度)

### ◆派遣前研修

6/24 (土)、6/25 (日)

- 研修の趣旨、JICAや日本の国際協力、訪問国に対する理解を深める。
- 開発教育/国際理解教育への理解と参加型学習の手法を学ぶ。
- 研修における各自の役割理解、準備。

### ◆派遣後研修

8/20 (日)

- 海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

### ◆各県報告会

2月～3月

- 研修での学び、授業実践活動を各県で報告することで、地域の教員・教育関係者への啓発を図る。
- 地域における国際理解教育・開発教育関心層のネットワーキングをはかる。

### ◆海外研修

ザンビア 7/23 (日)～7/31 (月)  
パラグアイ 8/1 (火)～8/11 (金)

- 訪問国の現状や国際協力の必要性、日本との関係について、実際の現場を訪問することで体験、理解する。
- 授業実践に必要な教材の材料等を収集する。
- 児童生徒に学ばせたい内容、授業の想定を掘り下げる。

### ◆授業実践

9月～12月

- 研修の経験を生かした授業を実施し、児童生徒の学びにどうつながったか、あるいは児童生徒に予期せぬ反応・学びがあったかをグループで評価・検討する。
- これを通じ授業設計・運営の教訓を得ると同時に、さらなるブラッシュアップを目指す。

### ◆総括研修

2/18 (日)

- 参加者全体で実践内容を共有・考察することで、よりよい実践ができるようにする。

### ◆教師海外研修参加後

(翌年度以降)

- 研修の成果を生かして、各所属校および地域で国際理解教育/開発教育を推進
- 授業/活動のブラッシュアップ
- JICA国際理解教育/開発教育支援プログラムの活用
- 実践者のネットワークへの参加 等

# 3

## 派遣前研修

6月24日(土)、25日(日)

### 目的

- (1) 地球規模の課題、途上国の現状、国際協力・ODA、JICA 事業、訪問国の概要等を理解する。国際理解・開発教育の理念・意義を理解する。
- (2) 児童生徒の学びのために、海外研修で得たことをどのように授業にできるか校種・教科を超えて可能性／選択肢を広げる。
- (3) 研修における各自の役割を理解する。海外研修における各種手続き・事前準備を行う。

### 1 日目

時間	プログラム	講師・進行
10:00	開会宣言、自己紹介	JICA 東京
11:00	【講義】 JICA 事業、教師海外研修について	JICA 東京
11:45	休憩	
11:55	【講義・演習】持続可能な社会の担い手づくりへ～SDGs の本質を活かし、国連・ESD の 10 年の経験を活かす	東京都市大学教授 佐藤 真久 先生
12:55	昼食・移動	
13:55	<国別> 【講義】派遣国概要・安全情報	パラグアイ：JICA 村上幸枝 ザンビア：JICA 松村元博
15:15	<国別> ・グループ内での係分担、現地での授業グループ決め等	JICA 東京
15:50	休憩/移動	
16:00	【渡航ブリーフィング】 ・渡航留意点、航空券手配、安全対策・保険等	JICA 東京
16:30	【講義・演習】チームでの授業づくりの説明とチーム決め★	教育環境デザイン研究所 畑 文子 先生
17:30	事務連絡・全員集合写真撮影	JICA 東京

### ★テーマ決め

今回は、「チームでの授業作り」という初の試み。子ども達に何を伝えたいか、それぞれが付箋に書いて壁に貼り出し、共通するテーマに分類していきました。

同じテーマを選んだ人同士でチームを作り、校種も、教科も、訪問する国もバラバラな4～5名のチームメンバーと一緒に授業を考えていきます。



## 2 日 目

時間	プログラム	講師・進行
9:00	事務連絡	JICA 東京
9:10	【講義・演習】★ 教師海外研修で何を学ぶか？～「知識構成型ジグソー法」 を活用して～	国立教育政策研究所 白水 始 先生 教育環境デザイン研究所 畑 文子 先生
10:40	休憩	
10:50	【チーム活動】 子どもたちに何を学んでほしいか	白水先生、畑先生
11:30	昼食	
12:30	プレ海外研修体験！ その国にゆかりがある人から話を聞く、インタビュー ・協力隊体験談（ザンビア・パラグアイ） ・研修員との交流（ザンビア）	-クマガイ・ヤマシタ ミ ルジャン・メグミ -篠原 七恵 -田澤 典希 -Namufungwe Kisha
13:50	休憩	
14:00	【チーム活動】現地で集めてこよう！ ・前コマで得た情報を簡単に共有 ・授業をデザインし、現地で収集する情報、グループ内での役割分担	JICA 東京
15:00	休憩	
15:10	派遣前研修振り返り	東京都市大学教授 佐藤 真久 先生
16:10	閉会挨拶	JICA 東京

### ★ジグソー法の体験

「知識構成型ジグソー法（※）」を体験！

オーストラリア人の友達に留学先を進めるなら、ザンビア？パラグアイ？それとも日本…？自分の言葉で説明したり、他人の説明に耳を傾けたり、わかってとして自分の考えを変えたり…。関わり合いを通して、一人ひとりが学びを深めることができました。

※知識構成型ジグソー法

<https://ni-coref.or.jp/archives/5515>



# 4

## 海外研修（ザンビア）

### ザンビア共和国 (Republic of Zambia)



- [首都] ルサカ
- [面積] 752.61 千平方キロメートル（日本の約 2 倍）
- [人口] 2,001 万人（2022 年：世銀）
- [民族] 73 部族（トンガ系、ニャンジャ系、ベンバ系、ルンダ系）
- [言語] 英語（公用語）、ベンバ語、ニャンジャ語、トンガ語
- [宗教] 8 割近くはキリスト教、その他 イスラム教、ヒンドゥー教、伝統宗教
- [主要産業] 鉱業（銅、コバルト等）、農業（トウモロコシ、綿花、タバコ、大豆）、観光
- [GDP] 297 億米ドル（2022 年：世銀）
- [一人当たりの GNI] 1,170 米ドル（2022 年：世銀）
- [経済成長率] 4.7%（2022 年：世銀）
- [日本の対ザンビア貿易]
- （ア）貿易額（2022 年：財務省貿易統計） 輸出：140 億円 / 輸入：33.5 億円
- （イ）主要品目 輸出：車両及び部品、タイヤ、化学製品等  
輸入：コバルト、銅、貴石及び半貴石、タバコ等
- [通貨] ザンビア・クワチャ（ZMW）
- [日本の援助実績] 有償資金協力：464.75 億円 / 無償資金協力：1203.80 億円 /  
技術協力実績：678.45 億円（2020 年度までの累積）
- [主要援助国] (1) 米国 (324.83) (2) 英国 (65.40) (3) スウェーデン (57.05)  
(4) 日本 (46.74) (5) ドイツ (33.52)  
(2019 年支出総額、単位：百万ドル DAC)
- [在留邦人] 146 人（2022 年 10 月現在：外務省）
- [在日ザンビア人数] 155 人（2022 年 6 月現在：法務省）

[外務省ホームページより]



## ザンビア 研修日程

7/23 (日) - 24 (月)

羽田発 (ドバイ経由) ルサカ着

7/25 (火)

[AM]

### 事務所ブリーフィング

- 安全・健康管理、研修日程について説明

### ナショナルサイエンスセンター

- ザンビア内 STEM 教育の中心センター見学

[PM] 以下、二手に分かれて訪問

- ・ルサカ郡第一次レベル病院運営管理能力強化プロジェクト
- ・ルサカ市きれいな街プロジェクト
- 施設見学、関係者インタビュー



※廃棄物最終処分場、ここで生計を立てる人もいる

7/26 (水)

[AM]

### デービッドカウンダ STEM 中等学校 (進学校)

(以下、三手に分かれて訪問)

- ・ジャイレ孤児コミュニティ初等学校
- ・トゥルーバインコミュニティ初等学校
- ・ナカララ・コミュニティスクール

- 教員による施設紹介、児童との交流・授業、インタビュー

[PM]

### カシシ農業研修センター

- 派遣中協力隊員による農場・加工場紹介、質疑応答



※青空教室。初めての折り紙に子供たちは夢中!

7/27 (木)

[AM]

### 農業省ルサカ州農業事務局

- 事務所長によるザンビア農業事情の説明、質疑応答

[AM/PM]

### 宮城県丸森町による草の根事業・小規模農家における市場志向型営農普及プロジェクト

- 現地調整員、農業従事者、住民によるプロジェクト紹介、インタビュー、現地食 (ランチ) づくり



※お母さんたちのサポートの元現地ごはんの調理に挑戦!

7/28 (金)

[AM]

**NPO コーナーストーンオブホープ**

- HIV 孤児等のために運営される学校で、識字コンペティション審査・外遊び

[PM]

**在ザンビア日本大使館表敬訪問**

**JICA ザンビア事務所報告**

- 英語、日本語でこの研修での出会い・学び、そして2学期の授業計画を報告



※ソーラン節のかけ声と振り付け教えて、皆でダンスタイム

7/29 (土)

[AM]

**アウトリーチ現場**

- ストリートチルドレンへの飲食物配給、支援団体による地域状況・活動の説明

**ンサンサ孤児院**

- ストリートチルドレンへの飲食物配給

[PM]

**教材等購入**



※踊り、歌い、サッカーした孤児院の子供たちと

7/30 (日)

[AM]

**ザンビア国立博物館**

**Eureka (草食動物が点在する野外施設)**

[PM]

**JICA 事務所にて研修振り返り、所長報告・意見交換**

夜：ルサカ発



※研修最終日、JICA ザンビア事務所前で

7/31 (月)

(ドバイ経由) 羽田着

## ザンビア 私の1枚



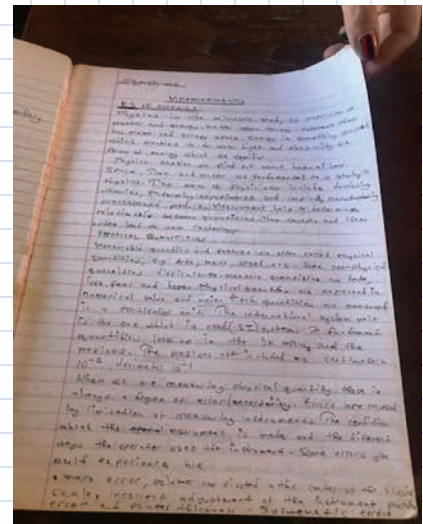
### 「ルサカを守る最後の砦」

研修で最初に衝撃を受けた、ルサカ市内の最終ゴミ処分場です。この場所がルサカを守っているのだと、プラスチックやメタルを求めるバイヤーさんや、それらを求めて歩き回る地元の方々、現地を守り運営し、日々ゴミと格闘しているスタッフの方々を見て、あらためて、「お金を投ずればなんとかなるのではないか」と考えていた自分の視野の狭さに気付きました。

渡邊 千恵（埼玉県立所沢西高等学校）

### 「薬品や実験器具の前に必要なもの」

理科教育に力を入れているデービットカウンダ STEM 中等学校を訪問した。理科備品はそれなりにあったが、あまり使用されていなかった。子どものノートは予想・結果・考察の記入が見られず、教科書の転写が目立っていた。隊員の話では、そもそも学習問題が立ち上がらないと言う。解説的な授業しか経験していない子どもの科学の芽は眠ったままになっているのだと感じた。隊員が担当する授業では、教師との対話やグループワークを通し、科学の芽や茎が育ち始めているようだ。しかし、子どもの疑問から始まる授業は、これまでの授業形態を大きく変えることになり、教員の負担が大きく、なかなか現場に浸透しない。教員のモチベーションを上げるためにも、子どもを主体とした教育を築くためにも、この国に必要な教育の一步は、教師と子どもの対話なのだと感じた。



藤井 美奈子（長野県 長野市立大岡中学校）



### 「They don't have enough, but...」

JIREH Community School を訪問しました。折り紙とソーラン節を教えた時の子供たちの喜びようと目の輝きに感動。日本では考えられないことです。「ないこと＝不幸せ」ではない、と子供たちから学びました。開発途上国で「ないこと」がきつと多いのですが、子供も大人も笑顔の多い国でした。

国際協力に限らず、他者との助け合いにおいて、上からモノやお金を落とすような支援は違うのかもしれませんが、その人が、その人なりの幸せに近づけるように考えることが大切なのは、と考えるようになりました。

遠藤 大輔（東京都立板橋有徳高等学校）



## 「ニーズを理解することの 重要さと困難さ」

この写真は、カシ農業研修センターで購入した牛乳と飲むヨーグルトです。味が濃く、とてもおいしかったです。

現地隊員の方のお話では、以前はパッケージには成分等詳細な記載がなく、また在庫管理もしっかりと行われていない等課題が多いことや、何か付加価値をつけて販売をすることに困難さを感じるとのことでした。

また、日本の市場基準でアドバイスや改善点を伝えても、なかなか受け入れられない現実もあると話されていました。こちらが良かれと思い行動しても、相手にとっては不要なこと、ということが起こるのだと改めて実感しました。相手のニーズや、何を必要としているのかよく聞き見極め適切な行動を起こすことの重要さと困難さを同時に実感しました。

玉井 彩都（長野県 中野市立高社中学校）

## 「うまくいかないんです（笑）」

宮城県丸森町との草の根技術プロジェクトでザンビアの小規模農家に技術を伝える高島さん。技術を伝える側と伝えられる側のニーズの違いや必要性を理解するための学力（計算能力、識字力）不足などから、伝える技術が定着しないこともしばしば。その体験談をまぶしい笑顔で話す姿がとても印象的だった。笑顔でトライ and エラーに挑戦する人、あなたの近くにいますか？笑

宮田 千尋（埼玉県立上尾かしの木特別支援学校）



## 「分断のラインは？ 真の豊かさとは？」

授業実践で使用した画像の中で生徒にとって一番衝撃的なものであったようだ。橋の上と下でこれほど貧富の差が歴然としている開発途上国の現状を実感したからである。私たちの宿泊したホテルは何不自由なく、その向かいのショッピングモールはモノであふれていた。しかし、そこから5分程度歩いた場所にストリートチルドレンが空腹を紛らわすためにシンナーを吸っている現実があった。真の豊かさとは何か？改めて考えさせられた。

水野 修（東京都 和洋九段女子中学校・高等学校）



## 「ザンビアと日本の 農業の間には…」

日本の丸森町はザンビアと農業提携を行い、食料の安定的供給、栄養の改善、収入の向上に取り組んできた。しかし、トマト畑の様子を見ると考え方の違いが良くわかる。生育方法や加工に手をかけて農家収入を上げようという丸森町の考え方に対し、ザンビアは手をかけずに量ができることに価値を見いだしているようである。

五ノ井 ゆかり  
(埼玉県立入間わかくさ高等特別支援学校)

## 「ザンビアで学んだ 大切なこと」

この写真は、丸森町プロジェクトの視察時に、昼食の準備で鶏を現地の人と一緒に捌かせてもらった様子の写真である。鶏を食べるには加工する必要があるという当たり前のことをこのとき学んだのだが、それと同時にこの体験を通して、ザンビアの良い点とザンビアの課題点を両方見いだすことができた。良い点は、こういった作業を共同で行うことで、コミュニティの強化につながるという点である。課題点は、食肉一つをとってみても、分業体制がまだまだ確立しておらず、経済発展していく余地がみられるという点である。この両方を見いだすことができたとても思い出深い活動であったので、私の一枚として選定した。

梅村 唯斗  
(群馬県 高崎市立矢中中学校)



## 「団結すること 分かち合うこと」

この写真はコーナーストーンオブホープで撮影しました。この孤児院は、コンパウンドの中にある、両親のいない子やエイズに感染している子が通っています。

「ぼくたちはここで、団結することと分かち合うことを学びました。」生徒の一人が、発表してくれたスピーチの言葉です。教育は心を育てることだと、感じました。

澤野 裕香  
(埼玉県 和光市立北原小学校)



## 「アウトリーチ活動にて」

この日までに見学したコミュニティスクール、コーナーストーンオブホープ（HIV 孤児のための学校）で出会った子どもたちは、物質的、経済的に恵まれていないにも関わらず、楽しそうに活動する様子や屈託のない笑顔が印象的だった。それゆえに、物質的な豊かさを追求める必要はないのではないか、という気持ちが自身の中で強くなっていった。

そんな中でのアウトリーチ活動。ここに集まった子どもたちは、ペットボトルに入れられた薬物を摂取し、空腹や寒さを紛らわせて何とか生活しているという。これは、その薬物を発泡スチロール?にかけた時の様子を写した写真である。「物質的な豊かさと幸せはイコールではない」そんな自分の考えを振り出しに戻されたようだった。

岡田 紘明  
(千葉県 市川市立大町小学校)

## 「ンサンサ孤児院でのムタレさんのお話」

この写真は、ストリートチルドレンだった子どもたちがいるンサンサ孤児院について、ムタレ桜子ザイオンさんから話を聞いているときの1枚です。ムタレさんが、本当に子どもたちのことを考えていることが分かって、心動かされました。



岡野 有為  
(千葉県 千葉大学教育学部付属小学校)



## 「開発途上国 ≠ 「まずしい」「かわいそう」」

- ・ルサカ中心部では多くの自動車が走行して、交通渋滞は当たり前。いたるところで工事をしており、これからのパワーを感じた。
- ・JICAザンビアの米林所長より  
『途上国＝「かわいそう」「まずしい」という視点以外に、日本よりも「恵まれている」「優れている」といった別の視点で考えていくことも必要。途上国の理解を通じて、日本の豊かさと貧しさを実感してほしい。』
- ・ザンビアでは開発が今まさに進行しており、途上国という言葉に対するイメージが変わるきっかけとなった。

中村 太郎  
(千葉県立国府台高等学校)

# 5

## 海外研修（パラグアイ）

### パラグアイ共和国 (Republic of Paraguay)



〔首都〕 アスンシオン

〔面積〕 40万6,752平方キロメートル（日本の約1.1倍）

〔人口〕 約678万人（2022年、世銀）

〔民族〕 混血（白人と先住民）95%、先住民2%、欧州系2%、その他1%

〔言語〕 スペイン語、グアラニー語（ともに公用語）

〔宗教〕 主にカトリック（信教の自由は憲法で保障）

〔主要産業〕 農業、製造業（自動車部品など）、電力

〔GDP〕 417億ドル（2022年 世銀）

〔一人当たりのGNI〕 6,153ドル（2022年 世銀）

〔経済成長率〕 0.1%（2022年 世銀）

#### 〔パラグアイの対日貿易〕

（ア）貿易額（2022年：財務省貿易統計） 輸出：35.0億円 / 輸入：121.6億円

（イ）主要品目 輸出：ごま（採油用）、飼料（植物性油かす）、非鉄卑金属くず  
輸入：輸送用機器、電気機器、一般機械、ゴム製品

〔通貨〕 グアラニー

〔日本の援助実績〕 有償資金協力：1,732.13億円 / 無償資金協力：403.21億円 /  
技術協力実績：908.57億円（2021年度までの累積）

〔主要援助国〕 (1) 韓国（65.44百万ドル） (2) 日本（53.44百万ドル）  
(3) フランス（43.01百万ドル）

1976年以降2004年、2011年、2014年、2020年を除き、日本が最大の援助国。  
（2020年DAC諸国二国間援助）

〔在留邦人〕 3,722名（2022年10月、外務省）

〔在日パラグアイ人数〕 2,149名（2022年6月現在：法務省）

[外務省ホームページより]

## パラグアイ 研修日程

8/1 (火)

深夜：羽田発（ドバイ→サンパウロ経由）

8/2 (水)

朝：アスンシオン着

[AM]

事務所ブリーフィング

－ 安全・健康管理、研修日程について説明

[PM]

カテウラ音楽団学校※

－ 学校長からの説明、施設見学、活動見学



※ゴミから作った楽器の一部に日本の500円玉も追加!

8/3 (木)

[AM]

ペケニョコッドレンゴ財団（障害児・者施設）※

－ 施設代表者からの説明を受けながら施設見学、派遣中の協力隊員へのインタビュー

[PM]

栄養管理アドバイザー（個別専門家）

－ 栄養管理プロジェクトで派遣されている専門家からの説明、質疑応答



※教材について説明を受けているところ

8/4 (金)

[AM]

ラパス日本人会、ラパス農業協同組合

－ 概要説明、施設見学

[PM]

ラパス日本語学校※

－ 授業見学、活動実践、インタビュー

[夕方～] ホームステイ



※日本語学校の子も達とリズム遊び

8/5 (土)

[AM]

ラパス長寿会 餅つき交流会

－ 長寿会、日本語学校の生徒と一緒に餅つき

[PM]

エンカルナシオン 街歩き

－ 大学、海岸、教会等



※子ども達と餡子餅を作っているところ



## 8/6 (日)

### [AM]

#### 日系アイデンティティセンター

- － 施設見学、施設で活動している日系人ボランティアへの質疑応答

### [PM]

- 移動 エンカルナシオン～アスンシオン (約6時間)



※施設内にある茶室で説明を聞いているところ

## 8/7 (月)

### [AM]

#### サン・エンリケ・デ・オソ小学校 (金融教育授業) ※

- － 授業見学、協力隊員・教員へのインタビュー

### [PM]

#### ニャンドゥティ (パラグアイの伝統工芸)・ブランディング事業

- － イタウグア市長による事業説明、作り手のお宅訪問、インタビュー



※下校前の小学校の子ども達と

## 8/8 (火)

### [AM]

#### ランバレの丘 (カテウラ地域のゴミ処分場、スラム街が見える丘)

### [PM]

#### アドルフォ・マリア・モンヘス小学校※

- － 授業見学、協力隊員へのインタビュー



※日本から持っていった算数セットの説明

## 8/9 (水)

### [AM]

#### 教材等購入

### [PM]

#### 海外研修報告会

- － オンラインにてパラグアイ事務所に報告  
夕方：アスンシオン発



アスンシオンの空港で最後の1枚!

## 8/10 (木) - 11 (金)

(サンパウロ→ドバイ経由) 成田着

## パラグアイ 私の1枚



### 「音楽でつながる安心安全な世界」

カテウラ音楽団を訪れた時に撮影した写真。写っているのは、アルバを担当している男の子。この男の子は、器用で集中が高く、難しいことに粘り強く練習に取り組めるという個性を先生に認められ、難しい演奏技術を必要とするアルバの担当になった。そして先生の期待通り練習に励み、彼は高い演奏技術を持った演奏家に成長した。今では海外公演の代表に選ばれて大きなステージで自信と誇りを持って演奏している。彼はこの楽団所属して、自分に誇れることや仲間や夢を見つけたことで、安心安全に生きていけるようになった。そんな彼は音楽で世界を繋いでいることの証として楽器の一部を世界各国のコインでつくっている。私の渡した500円玉が彼のアルバ一部となり、世界を繋ぐ役に立ててもらえると思うと自分も誇らしいので、この一枚を選んだ。

下井 慈（長野県 根羽村立義務教育学校根羽学園）

### 「ゴミ」の意味

ゴミの写真である。研修の前半まで、わたしにとってゴミはゴミでしかなかった。しかし、住民がゴミを売って生計を立てている。楽団では、音楽を通して居場所を作り、その目の前にあるゴミを使って楽器を作っている。ペケニョ・コットレンゴ財団の先生は、いらぬものを使って教材を作っている。「ゴミ」を違う目線で見た時、それらは循環資源、生活の糧、居場所と、様々な見方ができた。無意識に、自分や日本を基準にして考えてしまっていることに気付いた。



有本 眞実（新潟県 佐渡市立河崎小学校）



### 「拓魂の精神」

ラ・パス移住地の共同墓地にあった「拓魂碑」。  
かつて日本からこの地へ移住し、厳しい環境の中、尽力された多くの先達がいることを知った。彼らは、原始林から開拓し、自治組織（現在は日本人会）を創り、生活環境を整えてきた。今日に至るまで、自分たち（日本人、日系人）だけがよければいいという考えではなく、現地の人のためになることもしてきたという（例えば、碑の建つ敷地の一部は、現地の人が使えるようになっている）。困難な境遇においても、先達たちは勤勉さや礼儀正しさを失わず、他者と調和を図ってきた。それゆえ、現地の人々は、感謝や尊敬の念を日系人や日本人に対して抱いたのだろう。出逢った日本人会や長寿会の方々、日本語学校の先生方の取組やお話からもその精神を感じた。国籍を問わず、今を生きる私たちは「拓魂碑」から大切なことを学ぶことができる。

吉田 裕文（群馬県 高崎市立八幡小学校）



## 「ラパスでの貴重な出会い」

ラパス日本語学校の子どもたちや日本人会のみなさんとの関わりから、日系移民、日本人として大切にしていきたいことについて深く考えるきっかけになりました。日系移民の方々の歴史やバラグアイでの生活を日本の子どもたちと共有し、日本で生活する私たちは、どんなことを大切に生活していくべきかを考えていきたいと思いました。

笠原 香織（群馬県 太田市立沢野小学校）

## 「受け継がれるもの」

ラパス日本語学校の餅つき大会の様子。人と人が直接交流することで、伝統や文化は継承される。自らの「ルーツ」を重んじる前の世代、「自分は自分」と捉える次の世代。意識の転換期を迎え、今後の日系コミュニティーのあり方が問われるが、日本のよき伝統や文化は残していきたいという「思い」は、世代を超えてこれからも受け継がれていくと感じた。

水澤 真也（新潟県 聖籠町立山倉小学校）



## 「開かれた日本人会」

エンカルナシオンの日本人会が開催したバザーの様子です。商品は日本人会の方々が提供しています。購入は日本人会の会員でなくても誰でも可能です。売上は日本人会の運営資金になります。多文化共生というキーワードを思い浮かべ、異文化に受け込むには工夫と試行錯誤の地道な積み重ねが必要だと感じました。

森岡 浩希（東京都 目白研心中学校高等学校）

## 「ニャンドゥティの価値」

グアラニー語で「蜘蛛の巣」を意味するバラグアイの伝統工芸ニャンドゥティ。美しい色の糸で繊細な刺繍が施され、すべて手作業で作られているそうです。制作者の方の手間も時間もかかっているのに、販売者には安く買い取られ売られてしまう、フェアトレードがされていないのが現状だそうです。労働に合った収入が得られないことで、後継者も減ってしまっているそうです。長野県でも、竹細工や水引、木曾漆器など後継者不足の状況が続いていることを考えると、解決の難しさを感じました。



大日方 あずみ（長野県 富士見町立境小学校）



## 「ものの価値とお金」

“10000 グアラニー札”（パラグアイの通貨：日本円で約 200 円※ 2023 年 8 月）

ものの価値はだれが決めるのだろうか。空港に見送りに来てくれた現地スタッフの方に使いきれなかった紙幣を託してしまった。日本に帰ってからそのお金の価値を考えてみた。停車中の車の窓拭き 1 回で得られる収入は 1000Gs、パラグアイ伝統刺繍のニャンドゥテイも 5000Gs から購入できる。

自分の行為が恥ずかしくなったと同時に本当に正しいものの価値とは何か、決めるのは誰かをじっくり考えたいと思った。

植木 凡子  
(東京都 白百合学園小学校)

## 「自らのルーツを辿る」

日本から遥か彼方、パラグアイでみた和太鼓の演奏。パラグアイで生まれ、パラグアイで育ち、日本のルーツをもつ人々は、日本の文化を大切にしている。彼らが演奏する【ミヤケ】は、いつ、誰がもたらしたものののだろうか。大人から子供に口伝え、形を変えながらも大切に守り抜かれる文化に身が奮い立つのを感じた。

大平 要  
(東京都 青梅市立第三中学校)



## 「世代を超えて 受け継がれていくもの」

ラパス日本人会の餅つき大会。日本人のつながり、血のつながりを大切にし、餅つき大会等の日本伝統行事でイベントを通じ、日本文化の継承を重要視している。日系 3 世、4 世となるにつれての希薄化が懸念される。日本から遠く離れた地球の裏側で、同じ日本人のルーツを持つ世代を超えた同

士が、力を合わせて取り組む姿に、アイデンティティとは何か、など思いを馳せていた。

富澤 喜一  
(東京都立荒川工科高校 定時制課程)

# 6 派遣後研修 8月20日(日)

## 目的

海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える

時間	プログラム	講師・進行
09:30	派遣後研修全体説明	JICA 東京
09:40	「最も印象的だった写真」を使い海外研修の体験共有	JICA 東京
10:10	【講義・演習】 海外研修の体験からの学びと自分自身の変容について	東京都市大学 教授 佐藤真久 先生
	休憩・移動	
11:10	授業チームごとに海外研修の体験の整理、授業案意見交換	JICA 東京
13:20	ごちゃまぜタイム 各チームの授業計画・悩みの共有 (メンバーをいれかえて 30分×2回)	JICA 東京
14:20	授業チームごとに前時の内容シェア、今後のスケジュール相談、役割分担	JICA 東京
	休憩・移動	
15:45	2学期に向けて、想い・悩み・意気込みのシェア	JICA 東京
16:15	閉会挨拶	JICA 東京

「途上国現場に行って変わったこと、変わらなかったこと」まずは各自で自分自身個を見つめ直します。その後は近くの先生と考えをシェア！今なお残り続ける五感の感覚や、想定外の現実、そして”モヤモヤ”。自己変容と自身の体験を振り返った後は、そんな「私」が授業で何を児童生徒と向き合いたいのか考えます。

そう、本研修にとって一番大切といっても過言ではないのは『2学期の授業』。事後研修では、関心テーマごとの4～5人のチームで、2学期の授業案について議論を重ねました。違う国へ行ったから、違う校種だからこその視点も入り、各チーム白熱した話し合いになりました。



# 7 授業実践

今年新たな取組として、5つのテーマに分かれ、4～5名のチームで授業作りに挑戦しました！校種や科目が違うからこそ見える視点、ザンビア・パラグアイそれぞれの訪問経験からの視点で意見を出し合い、代表者の授業見学・協議会を行いました。

## 【文化】

チーム  
P. 23～

代表実践 : 有本 眞実 (パラグアイ・新潟・小)  
チームメンバー : 富澤 喜一 (パラグアイ・東京・高)  
水野 修 (ザンビア・東京・中高)  
岡田 紘明 (ザンビア・千葉・小)

## 【多様性】

チーム  
P. 29～

代表実践 : 藤井 美奈子 (ザンビア・長野・中)  
チームメンバー : 岡野 有為 (ザンビア・千葉・小)  
植木 凡子 (パラグアイ・東京・小)  
吉田 裕文 (パラグアイ・群馬・小)

## 【パートナーシップ】

チーム  
P. 42～

代表実践 : 梅村 唯斗 (ザンビア・群馬・中)  
チームメンバー : 玉井 彩郁 (ザンビア・長野・中)  
森岡 浩希 (パラグアイ・東京・中高)  
下井 慈 (パラグアイ・長野・小中)  
笠原 香織 (パラグアイ・群馬・小)

## 【幸せ】

チーム  
P. 51～

代表実践 : 渡邊 千恵 (ザンビア・埼玉・高)  
チームメンバー : 中村 太郎 (ザンビア・千葉・高)  
宮田 千尋 (ザンビア・埼玉・特支)  
大平 要 (パラグアイ・東京・中)  
大日方 あずみ (パラグアイ・長野・小)

## 【ジブンゴト】

チーム  
P. 56～

代表実践 : 水澤 真也 (パラグアイ・新潟・小)  
チームメンバー : 五ノ井 ゆかり (ザンビア・埼玉・特支)  
遠藤 大輔 (ザンビア・東京・高)  
澤野 裕香 (ザンビア・埼玉・小)

# 「伝統を受け継ぐ」とは ～パラグアイ、ザンビア、佐渡、市川の暮らしから～

## 【実践者】

氏名	有本 眞実	学校名	新潟県佐渡市立河崎小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	5年 1組（18名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023年9月～11月（8時間）		

## 実施概要

### 01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

### 02 単元名と単元目標

**単元名：**「伝統を受け継ぐ」とは ～パラグアイ、ザンビア、佐渡、市川の暮らしから～

**単元目標：**伝統工芸品の作り手の思いや市川の暮らしを知る活動を通して、自分たちにとって身近な自然や伝統をはじめとする佐渡の魅力のかけがえのなさに気づき、これから自分たちにできることを考える。

**関連する学習指導要領上の目標：**第5章 総合的な学習の時間 第2の2、3

### 03 単元の評価規準

①知識及び技能	それぞれの国や地域に暮らす人たちが大切にしている文化や価値観があることを理解している。
②思考力、判断力、表現力等	活動を通して学んだ自分の思い、学びによる自己の変容等、自分の考えをまとめ、表現している。
③学びに向かう力、人間性等	国や地域の異なる文化や価値観を受け入れ、尊重するとともに、自他の考えのよさを生かしながら地域の一員として関わりを深めていこうとしている。

### 04 単元設定の理由・単元の意義

自学級の児童は地元を好ましく思っていない傾向にあった。「田舎すぎる」「楽しい場所がない」「早く都会に行きたい」という言葉がよく飛び交う。そこで、児童が実際に見ることができない外国の様子を見せたり、児童の憧れである首都圏の子どもたちと交流させたりすることを計画した。自学級の児童が今まで思いつかなかった地元の良さに気付いたり、この地域での暮らし方を考え直したりするきっかけをつくりたいと考えた。

#### 〈児童 / 生徒観〉

消極的な児童が多く、進んで発言する児童よりも、周りの様子をうかがった言動をする児童が多い。

学級内には日本とフィリピンのダブルルーツの児童が2人おり、国籍に対して柔軟な考えをもっている。今年度は4月からSDGsの学習をしており、自分の身の回りの事象に対して、SDGsの観点を結び付けて考えることが得意である。

### 〈指導観〉

新潟県内において、外国籍をもつ児童の割合は、首都圏、関西圏に比べるとまだまだ少ない。しかし、日本在住の外国出身者や、外国にルーツをもつ児童は年々増加傾向にある。現在、日本で生まれ育つ子どもたちが、外国出身者と関わる機会が増えることは明白であり、その時に相手の価値観を大切にできる人であってほしいと願っている。

そのため、外国の現状を自分たちの地域の現状と重ね合わせて考えたり、首都圏の子どもたちと交流したりすることで、自分の考えを広げ、ふるさとを大切に思う気持ちを育てることができると考えた。

## 05 単元計画（全9時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイと佐渡それぞれの伝統や文化を知る	パラグアイの文化を知る活動を通して、佐渡にも似た文化があることに気付き、文化のつながりを知ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パラグアイの伝統工芸や行事、食文化を知る。</li> <li>自分たちの地元にも、似たようなものがないか考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ニャンドゥティ</li> <li>布</li> <li>テルモ（マテ茶セット）</li> <li>写真、動画</li> </ul>
2	「価値」について考える	「グアラニー」での買い物体験を通して、ものには「価値」があることを知り、身の回りにはどのような「価値」があるのかを考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>100円は安い？高い？大金とは？</li> <li>パラグアイの通貨「グアラニー」</li> <li>パラグアイの通貨で買い物体験（10,000 グアラニーで何が幾つ買えるか？日本円にするとどれくらいか？）</li> <li>労力、もの、公演、交通費など、対価となるものの存在、自分の身の回りの「価値」を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>模擬紙幣</li> <li>買い物の商品（プリントしたもの）</li> </ul>
3	パラグアイの伝統工芸「ニャンドゥティ」について考える	ジグソー法でニャンドゥティについて調べる活動を通して、ニャンドゥティの価値を考え、伝統の継承に必要なものや時代背景を思い描くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>パラグアイの伝統工芸（ニャンドゥティ）について、ジグソー法で考える。【この伝統・文化に、いくら値段をつけますか】</li> <li>3人グループに戻って、それぞれチームで話し合ってきた考えを伝え合う。</li> <li>10年後を予想し、伝統を受け継ぐには、お金・継承する人々・粘り強さなどが必要なことに気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ニャンドゥティの資料、実物</li> </ul>



4 本時	「ニャンドゥティ」「マテ茶」「鬼太鼓」について、多くの人に知ってもらう方法を考える	伝統工芸品の作り手の思いを知る活動を通して、自分たちにとって身近な自然や伝統をはじめとする佐渡の魅力のかけがえのなさに気付き、これから自分たちにできることを考える。	パラグアイの「ニャンドゥティ」と「マテ茶」、佐渡の「鬼太鼓」について、多くの人に知ってもらう方法を考える ・「伝統」とは。 ・それぞれの資料をもとに、文化を継承、伝達する方法を考える。 ・3人グループに戻って、それぞれチームで話し合ってきた考えを伝え合う。 ・自分なら、どんな方法で伝えるかをまとめる。	・鬼太鼓、ニャンドゥティ、マテ茶の資料（インタビュー等）
5 ～ 7	自分たちの暮らす地域の良さを考え、首都圏の小学生に向けて発信し、お互いのクラス地域の良さや課題を考える	市川市の小学生との交流を通して、佐渡の良さに改めて気付いたり、他の地域の暮らしを思い描いたりすることができる。	・佐渡の良さは何だと思うか、話し合う。 ・その良さをまとめ、市川の小学校に発信・交流することを伝える。 ・PR動画の作成を行う。 ・交流会を実施し、それぞれの地域の文化や暮らしについて理解を深める。 ・それぞれの地域の良さは何か、考える（豊かさの追求）。	
8	自分たちはこれから何ができるのかを考える	地元の課題を考える活動を通して、未来の佐渡に必要なもの考える。	・自分の地域の課題を考える。 ・これからも住みたい地域であるために、今自分たちに何ができるかを話し合う。	

## 06 本時の展開（4時間目）

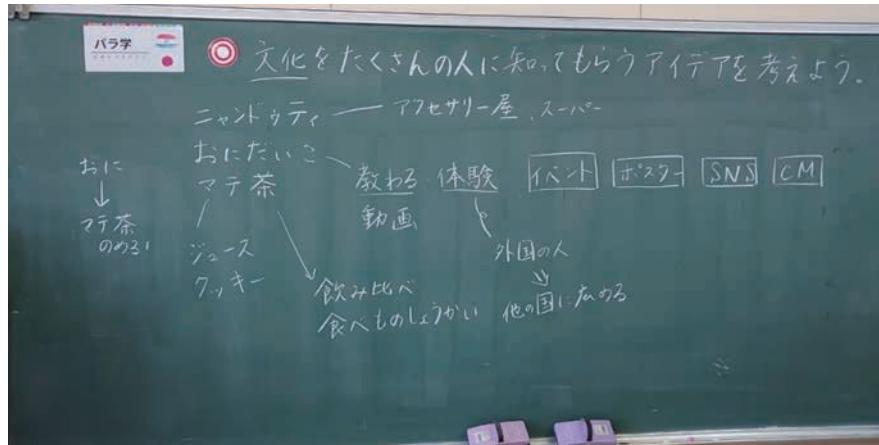
**本時のねらい：**伝統工芸品の作り手の思いを知る活動を通して、自分たちにとって身近な自然や伝統をはじめとする佐渡の魅力のかけがえのなさに気付き、これから自分たちにできることを考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入（5分）	T：前回ニャンドゥティについて考えたね。みんなは、もっとニャンドゥティが高く評価されたいって言うていたよね。もっと多くの人たちにニャンドゥティを知ってもらうことはできるかな？ C：できそう！例えば、ニャンドゥティの動画を作るとか。 T：なるほど。知ってもらう方法はあるそうだね。		・ニャンドゥティ

	<p>T：前、「パラグアイと佐渡の似ているところ探し」をしたときに、「もっと知りたいもの」で、「鬼太鼓」を書いていた人が何人もいたんだけど、意外と佐渡に住んでいても知らないことがあるんだね。</p> <p>C：見ているだけで、よくわからないかも。</p> <p>C：でも、迫力がすごいし、うちの地区は頑張っているよ。</p> <p>T：そうなんだね。どうやったら、その良さをもっとたくさんの人に知ってもらえるかな。</p>		
<p>展開 (30分)</p>	<p>◎もっと多くの人に、地元の文化の良さを伝えよう。</p> <p>T：パラグアイではニャンドゥティを大事にして、職人さんたちは「受け継ぎたい」「もっと知ってほしい」って言っていたんだよ。マテ茶も、日本ではあまり知られていないけれど、パラグアイではお馴染みの文化だし、なくしたくないと言っていたよ。佐渡では、鬼太鼓はどうか。</p> <p>C：無くしたくない。広めたい。</p> <p>T：それぞれの文化を、もっと多くの人に「いいね！」って思ってもらえるように、企画してください。それぞれ、エキスパートグループに分かれて考えてみます。</p> <p>C：鬼太鼓に関わる人たちは、鬼太鼓のリズムや迫力を感じてほしいと思っているんだね。実際に見せると、良さが伝わるんじゃない？</p> <p>C：いいね。YouTubeで見せるのはどう？</p> <p>C：ニャンドゥティの歴史が面白い。絵本にして伝えてみるのはどうか。</p> <p>C：マテ茶は、仲のいい人たちで集まって飲む習慣があるんだ。体にもいいし、「家族で飲むといいですよ」って試してみようか。</p> <p>T：元のグループに戻って、クロストークをします。グループで、イチオシのアイデアを企画書にまとめてください。</p> <p>C：実際に見せるアイデア、すごくいいね。それなら、マテ茶も実際に飲んでもらうといいかも。</p> <p>C：YouTubeなら全部紹介できそうだね。</p> <p>T：企画書の内容を発表してください。</p> <p>C：(発表する)</p>	<p>・【エキスパート活動】3つのグループに分かれて学び、話し合う。</p> <p>・各グループ共通の問いを出す。</p> <p>・【クロストーク】エキスパート活動での各グループの考えを交流する。</p> <p>・グループで企画書を作成し、発表する。</p>	<p>・ジグソー資料</p> <p>・鬼太鼓写真</p> <p>・マテ茶写真</p> <p>・企画書</p>
<p>まとめ (10分)</p>	<p>T：いろいろなアイデアが出ました。それぞれ、YouTubeを使ったり実際に見てもらったりすることで、何が伝わるのかな。</p> <p>C：凄さがわかる。感動が伝わる。</p> <p>T：全部のグループの発表を聞いて、最後に、今日担</p>		

	<p>当の文化を、自分ならどんな方法で伝えるかを書きます。</p> <p>C：やっぱり YouTube かな。動画は大人も子どもも見られるから。</p> <p>C：実際に見せた方が、感動が伝わりやすそう！</p> <p>T：今日学んだことを振り返りましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人に戻って考える。</li> <li>・ワークシートに記入させる。</li> </ul>	
--	---	---	--

## 07 板書計画



## 08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言・ワークシート記述・企画書作成

## 09 学校外との連携

- ・千葉県市川市立大町小学校
- ・佐渡汽船株式会社
- ・両津南埠頭ビル株式会社

## 10 学びの軌跡

<p><b>【A 児】振り返り</b></p> <p>9/15 ニャンドゥティのせんすはとても手間がかかるのに、1400 円なんて安くしたら人手や給料も少なくなる。そこまでして広めたいのかなあと疑問に思いました。</p> <p>9/22 伝統を伝えるなら、いろいろなやり方を考えないと伝統は伝わりにくいんじゃないかと思いました。鬼太鼓はなくしたくない伝統なので、SNS などで広めたいです。</p> <p>10/20 伝統は、今まで受け継いできた人の気</p>	<p><b>【B 児】振り返り</b></p> <p>9/15 <b>文化を続けるには材料、人、時間、材料のお金がかかる。</b>人は給料にするために高く売りたいけれど、あまり高いのは売れない。お金と生活は複雑。</p> <p>9/22 例えば、ポスターをかいて、イベントを開いてニャンドゥティを紹介していけば、<b>文化を日常品にできる</b>かもしれない。そのものの<b>魅力を伝えたら、文化が長く続く</b>と思う。</p> <p>10/20 佐渡の伝統の鬼太鼓は、お祭りになっ</p>
--	--

持ちがこめられている。時代が変わってなくなってしまうのは仕方ないかもしれないけど、できるだけなくさないようにしたい。

11/7 大町小学校と交流ができてよかった。佐渡のことをすごく知ってくれてうれしかった。大切にしている伝統や文化を知ってもらえるとうれしいんだなと分かった。

ているから日常になっている。鬼太鼓のイベントもあるから、たくさんの人が知っている。他にもできないかな？

11/7 動画を作って佐渡のことを伝えられたり、千葉のことを教えてもらったりして嬉しかった。佐渡の伝統が県外の人に伝わってたくさんの人に広まったらいいと思った。

## 11 海外研修で何を学び、どの部分を見童生徒に伝えようと思ったか

パラグアイではニャンドゥティの作り手不足が懸念されている。高齢化、低収入により、文化の継承が危ぶまれている事実を伝えたかった。伝統を守る必要はあるのか、もし必要性があるなら、時代に合わせた伝統の守り方や文化の形を考えていくべきである。佐渡であれば鬼太鼓をどう守っていくか、一緒に考えてみようと思った。

## 12 苦労した点

ジグソー法での指導に当たり、資料を作成するのが大変だった。小学校高学年が読んで分かる資料にするため、何度も作り直した。

## 13 改善点

- ・アイデアを作るときに視点を絞ったらよかった。ニャンドゥティ・鬼太鼓・マテ茶のアイデアを「いくつ取り入れてもいい」ことにしたため、例えばアイデアを1つに決めた班の中には、せっかく考えたのに意見を拾われない児童がいた。→アイデアを「ニャンドゥティ」1つに絞って後日6年生に授業をしたところ、いろいろな視点でニャンドゥティについて話し合うことができた。
- ・「文化は大切である」「受け継いでいく」前提での授業だった。子どもたちに「文化は必要か？」などと問いかける時間があってもよかった。
- ・本時の落としどころが不明であった。「企画書を作り上げる」「何かの知識を得る」など、ゴールを1つに定めるべきだった。

## 14 成果が出た点

3つの文化（有形、無形、飲食物）についてエキスパート活動をしたため、ニャンドゥティだけを考えるよりも視点が広がった。体験活動、出張など、たくさんアイデアが出された。

## 15 自由記述

子どもたちが次々と発言できてよかった。「鬼太鼓をなくしたくない」という気持ちが発言から表れていた。

# 「私」のこと知ってる？

～「私」の思いを想像し、世界で起きている様々な問題を考えよう～

## 【実践者】

氏名	藤井 美奈子	学校名	長野県長野市立大岡中学校
担当教科等	理科	対象学年（人数）	中学校全学年（11名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023年 10月 ～ 11月（全5時間）		

## 実施概要

### 01 実践する教科・領域

特別の教科 道徳・人権教育

### 02 単元名と単元目標

**単元名：**「私」のこと知ってる？～「私」の思いを想像し、世界で起きている様々な問題を考えよう～

**単元目標：**特別の教科道徳の中で、人権教育を扱うことを位置付け、子どもたちが世界で起きている様々な問題を多面的・多角的に捉えることを通して、世界の中の日本、世界の中の「私」について考えを深め、自己の見方や考え方を見直し、分断や差別のない社会の実現をしようとする意欲を育てる。

**関連する学習指導要領上の目標：**

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

### 03 単元の評価規準

①知識及び技能	自由、責任、正義、平等、尊厳、権利、義務、相互依存性、連帯性などの概念や、人権侵害などに関する歴史や現状に関する知識、人権課題の解決に必要な概念に関する知識をもとに、考えたり、書いたり、伝えたりすることができる。
②思考力、判断力、表現力等	自分の経験や価値観から、自分の考えを話したり、自分とは異なる友の考えを受け止め答えたりすることができる。また、答えが1つではない問いに対して、多面的・多角的に考え続けることができる。
③学びに向かう力、人間性等	日常生活での場面や、友との関わりの中で、道徳的価値観を具体的な行為として表そうとしていくことができる。

## 〈理由〉

これまでの教員生活の中で、特別の教科道徳において、教科としての研究を行ってこなかったことを省察した。さらに、人権教育において、どの学校でも、人権教育月間はあるものの、講師を招いて講演会を設定し、子どもたちに感想記入を求めたり、長野県同和教育推進協議会が発行する資料「あけぼの」を用いて同和問題やハンセン病など、具体的な人権課題に即した個別的な視点の諸問題を扱ったりすることで終わり、体系的な学びの場を築くことができていなかった。また、教材研究において、自分の中にある道徳的価値観を基準に行っていたことや、教育としての真の多様性を勉強せずに、人権教育の授業を展開していくことの危険性を感じるようになった。そこで、道徳教育のあり方や、人権教育の基本方針、人権教育を取り巻く諸情勢から学び直す必要性を感じるようになった。

そこで、本単元を道徳の位置にあげ、人権教育の3つの側面から捉えるために、途上国で起きている諸問題の実際と、それらが深刻化する原因などの資料をもとに、そこで生活する子どもの姿から、権利条約などの知識的側面に焦点を当てることを考えた。また、題材として、本単元の各時間で扱うそれぞれの「私」を選定することで、他者への共感性を高め、道徳的諸価値の理解をもとに、価値的・態度的側面を育てていくことを計画した。つまり、道徳科における「人間理解」及び「他者理解」を、人権教育における「他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度」と重ねて単元を組むということである。さらに、単元を通して、中学1年生から3年生までの発達段階の異なる子どもたちが交流する場を設けることで、課題に対して思考する技能や見極める力、他者の相違を認めて受容するなどの技能的側面を育てることができるのではないかと考えた。

## 〈意義〉

本研修で学んだことを、子どもに還元するために、授業者が感じたことや悩んだことを整理し、子どもの権利、経済発展とゴミ問題、差別問題など、途上国が抱える複雑に絡み合った問題に対して子どもたちと考えていきたいと願った。授業者とザンビアの心の距離と、子どもたちのそれとに温度差があることを冷静に受け止め、遠く離れた世界の自分を近い存在として、子どもたちが考えを深めていく姿の実現のために、授業者は、それぞれの時間で「私」という実在する人物に焦点を当てることを考えた。

## 〈児童／生徒観〉

本校は、山間部にある全校11名の小規模校である。全校生徒のうち9名が山村留学生で、山村留学センターと受け入れ農家で寝食をともに過ごしているため、生活そのものが異学年との交流である。そのため、3学年合同の授業を行っても、先輩に遠慮して自分の考えを言うことができないということではなく、1年生が2・3年生の考えに共感したり、2・3年生が1年生の理解を助けたりして、自己の考えを深めていく姿が見られる。また、教員も学年窓口（いわゆる担当学年）は決まっているものの、2週間ごとに学年をローテーションし、学級活動に関わっていることや、学校行事等で地域との関わりがあるため、一般的な学校に比べ、異世代の交流も多くある。また、都市農村交流で訪れる他校の中学生との出会いもあり、それをきっかけに、視覚障がい者との関わりができ、障がい者に対する自己の理解を深めたり、地域住民との関わりによって、人とつながることの大切さを感じたりするなど、他者を受容し共感できる素直さや人懐っこさをもっている。

一方、山間部で生活しているため、塾に行く、買い物に行くなど、自分で自由に行動することができず、不便さを感じていることもある。また、同世代との交流が限られていることから、授業等で、多様な考えに触れる機会が少なく、思考が限定されることもある。そこで、本単元を通して、世界

を捉えることで、多様な考え、多様な生き方を知り、多様性社会の中で自己を表現する力と、他者を受容する力を育てていきたいと考えた。

### 〈教材観・指導観〉

1 時間目は、谷川俊太郎の「そのこ」の詩の描写を、子どもの権利条約と照らし合わせながら読み解き、「そのこ」が住む世界を想像することで、守られていない子どもの権利を多面的・多角的に分析していく子どもの姿を期待している。さらに、自分にはたくさんの権利があるということと、権利が守られていない子どもたちが世界中に多くいるという事実を知った子どもが、自己の見方や考え方を見直し、人権擁護の重要性を感じながら、分断や差別のない社会の実現を切望することを期待している。たとえ、「問題が大きすぎるが故、今の自分に直接にできること等ないのではないか」と子どもが悲観しても、世界で起きている出来事の現状を知ることの必要性を感じたり、物事の本質を見ることの大切さに気付いたりすることが、公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲や態度につながると授業者は考えている。

2 時間目は、「ゴミ山にいる私」が抱えている問題について、“ゴミ山の実態”，“ゴミを拾う理由”，“日本のゴミ山”の3つをテーマに、ジグソー法を用いて「ゴミ山にいる私」やその背景にある問題を多面的・多角的に分析することで、「ゴミ山にいる私」に必要なことを想像しながら、先進国に住む私たちと、この問題の関わりについて考えていくことを計画した。前時に学習した子どもの権利条約の様々な視点を思い出し、「ゴミ山にいる私」が守られていない権利を想像しながら、途上国の問題を世界全体の問題として捉えることで、解決しなければいけない問題として考えていく姿を期待している。

3 時間目は、途上国が抱える問題点やゴミ処理における日本の制度を学んできた子どもたちに、日本のよさと問題点を考える場を設けることで、今まで当たり前感じていたことが、当たり前ではなかったことに気づき、よさとして捉え直したり、他国との関わりによって、日本のよさが作り出されていることに気付いたりする姿を期待している。また、これまで途上国が抱える問題を考えてきたが、途上国のよさについてイメージできる子どもは少ないと授業者は考える。そこで、直接聞いてみないと分からないという子どもの思いを引き出し、本物の声を聞く場として、授業者がザンビア訪問中に会った、HIV 孤児と向き合う NPO 団体「礎の石孤児院」で活躍している日本人のムタレ桜子さんとのつながりを活用し、ザンビアの中学生とオンラインで交流できる場を計画している。どのような交流にしていくか話し合う中で、相手から聞きたいこと、見てみたいこと、自分から伝えたいこと、見せたいことなど、ザンビアの環境やザンビアで生活する「私」に意識を向け、相手の立場に立った物事の見方や考え方で、自分たちの思いを伝えようとしていく姿を期待している。

4 時間目は実際に、コミュニティースクール（NPO などの支援による学校）に通うザンビアの中学生とオンライン交流することで、遠く感じていたザンビアとの心の距離が縮まり、途上国の問題をより真剣に受け止めたり、自分にできることを考えたりしていく姿を期待している。子どもたちは、これまでに交流することのなかった自分とは違う環境で生きる同世代の姿や考えに触れ、楽しいと思うことや、幸せを願う思いは自分と似ているということを感じ取ることで、世界の人々の平和を願う気持ちを大切にしようとする姿を期待している。

本時は、授業者がザンビア訪問中にムタレ桜子さんにインタビューしたときの動画を視聴する場面を設けることで、前時にザンビアの中学生と心的距離が近くなったと感じていた大岡中の子どもたちが、差別されている現実や、たたかわなくては生きていけない厳しさを突きつけられることで、再び、自分たちと大きな違いがあることに気付くとともに、これまでの学びを思い返しながらか、差別を生み出す社会の不便さや不公平さを多面的・多角的に考えていく姿を期待している。さらに、

ムタレ桜子さんの言葉の真意を想像する場面を中心に据え、差別が起こる社会の構造に着目しながら、意見交流を通して、差別に対する自己の考えを深めていく子どもの姿を期待している。

## 05 単元計画（全5時間）

時数	人権教育の視点・(道徳教育)	学習のねらい	学習活動	資料など
1	知識的側面 技能的側面 (C 公正・公平/社会正義)	・「そのこ」を読み、感じたことを共有する場面で、子どもの権利条約と照らし合わせながら「そのこ」が住む世界を想像し、守られていない子どもの権利を多面的・多角的に捉えることを通して、人権擁護の重要性を理解するとともに、人権擁護の実現に向けて行動しようとする意欲をもつことができるようにする。	1 「私」と出会う。【全体】 2 資料「そのこ」を読み、3つの班で場面を分け、「そのこ」が住む世界を、子どもの権利条約の観点から想像する。【班】 3 班で考えたことを発表し、共有する。【全体】 4 「そのこ」の詩の空欄に入る言葉を考える。【班・全体】 5 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	谷川俊太郎 「そのこ」  ユニセフ「子どもの権利条約カード」
2	知識的側面 価値的・態度的側面 (C 国際理解/国際貢献)	・「ゴミ山にいる私」が抱えている問題を共有する場面で、ジグソー法を用い、「ゴミ山にいる私」やその背景にある問題を多面的・多角的な見方で分析することを通して、途上国の問題を世界全体の問題として捉え、解決しようとする意欲をもつことができるようにする。	1 「ゴミ山にいる私」の写真から課題を見出す。【全体】 2 A ゴミ山の実態、B ゴミを拾う理由、C 日本のゴミ山の3つのグループに分かれ、それぞれの課題のエキスパート活動をする。【エキスパート班】 3 エキスパート班の情報をジグソー班にもち帰り「ゴミ山にいる私」が抱えている問題を分析する。【班・全体】 4 私たちの世代が途上国のために努力するべきことについて考える。【個人・全体】 5 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	廃棄物管理公社訪問時の動画 A ゴミ山の実態 B ゴミを拾う理由 C 日本のゴミ山
3	技能的側面 (B 相互理解/寛容)	・日本人から見る日本のよさと問題点、ザンビアのよさを考える場面で、ザンビアの人から聞きたいことや見たいことについて、項目を立て、内容を検討し合うことを通して、相手の立場に立った物事の見方や考え方で、自分たちの思いを伝えようとするようにすることができるようにする。	1 日本のよさと問題点について考える。【個人・全体】 2 ザンビア報告書を読み、ザンビアの中学生の暮らしを想像する。【全体】 3 オンラインで交流するための内容を考える。【全体】 4 交流内容を班で分担し、文章を考える。【班】 5 本時の学習を振り返る。【個人・全体】	コーナーストーン オブホープ・ンサン サ孤児院訪問時の動画  報告書
4	価値的・態度的側面 技能的側面 (B 相互理解) 寛容	・ザンビアの中学生とオンライン交流する場面で、自分たちの思いを伝えたり、互いに質問し合ったりすることを通して、心的距離の縮まりを感じ、途上国の問題をより真剣に受け止め、	1 前時に計画したことをオンラインで発表する。【全体】 2 ザンビアの子どもたちの発表を聞く。【全体】 3 それぞれの発表に対して、質問・感想を伝える。【全体】	ZOOM



		相手と自分を重ねて考えたり、これまでの自分の考えを見直したりすることができるようにする。	4 本時の学習を振り返り、自己の変容を自覚化する。【個人・全体】	
5	価値的・態度的側面 技能的側面 (C 公正・公平/社会正義)	本時案に記入	本時案に記入	ムタレさんインタビュー動画

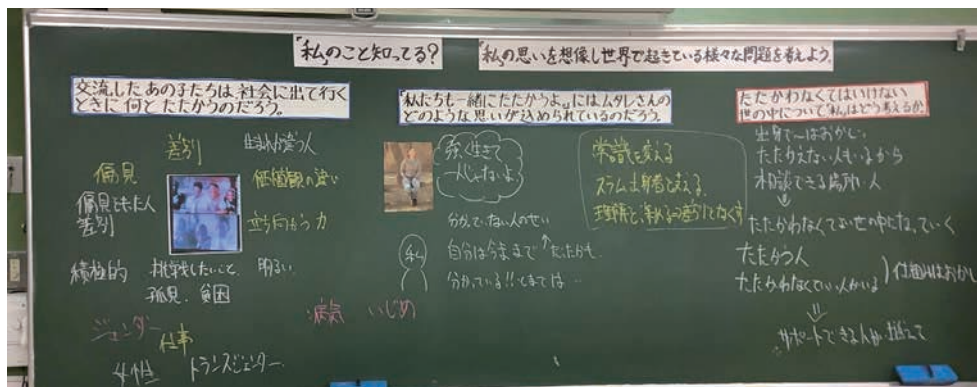
## 06 本時の展開（5 時間目）

**本時のねらい：**前時交流した NPO 団体「礎の石孤児院」で活躍しているムタレさんの動画を視聴し、スラム出身の子どもたちが社会に出ていくときに待ち受けている問題や差別する人の具体について考えながら、ムタレさんの言葉の真意を想像し、意見交流することを通して、差別が起きる現在の社会の構造を多面的・多角的に捉え、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができるようにする。

過程	学習活動 【学習形態】	予想される生徒の意識や姿 (◎)	教師の支援 (・) 評価
導入 (10 分)	1 動画を視聴し、感想を共有する。 【全体】	◎交流したあの子たちが、学校の先生からいじめられるなんてびっくり。 ◎スラム出身ということで、差別に遭うことはあるだろうけど、落ち込む人生を選ぶのか、たたかう人生を選ぶのって厳しいなと思った。	・動画を視聴し、前時に交流した相手に対して、差別を受けている事実に対し、感じたことを尋ね、被差別者の思いに共感した意見を取り上げることで、被差別者の思いに寄り添うことができるようにする。
展開 (30 分)	2 差別する人や差別意識によって起きる問題に着目する。【班・全体】	交流したあの子たちは、社会に出ていくときに、何とたたかうのだろう。 ◎差別する人から、嫌なこと言われたり、避けられたりするから、それとたたかっているのだと思う。 ◎「なんであなたが？」という先生の言葉は、スラム出身の人が試験を受けることがダメみたいな言い方をしていたから、差別されてできないことがあるんだと思う。就ける仕事の種類とかみたいに。だから、社会の仕組みとたたかうってこと。 ◎被差別者じゃない人が差別をするから、裕福な人とか、この問題を分かっている人が、見た目の違いなどから、相手を低く見たりしている。 ◎今、LGBTQ 問題で、誹謗中傷によって、自殺してしまうという問題がある。それで、LGBTQ の人が権利を求めて裁判をして制度を求めたりしている。 ◎差別されているということだから、女性差別とかよく聞く。権利を手に入れるために、女性がたたかって法律ができたということを社会で勉強した。	・交流したあの子たちが社会に出ていくときに、何とたたかっているのか尋ね、班で話し合う場を設けることで、差別する人の存在や差別意識によって起きる具体的な出来事に着目できるようにする。 ・どのような人が、どのような人を差別しているのか考える場を設け、スラム出身者と境遇が異なることに触れた意見を共有することで、自分自身と差別する側とのつながりについて意識することができるようにする。 ・補助発問「私たちの身のまわりにこんなたたかいはある？」と尋ねることで、ザンビアの階級差別問題から、性差別など、「私」の生活の中にある差別問題に視点をあてることができるようにする。 ・ザンビアの差別から様々な差別問題に広げて考えることができない生徒には、たたかっている相手や仕組みに着目す

<p>まとめ (10分)</p>	<p>3 ムタレさんの言葉の真意を想像し、差別問題について、多面的・多角的に考える。 【個人・班・全体】</p>	<p>中心発問 「私たちも一緒にたたかうよ」にはムタレさんのどのような思いが込められているのだろう。</p> <p>◎ムタレさんは、スラムの孤児に勉強する場や生活を支える施設を作る活動をして、社会の格差みたいなものを解消していこうとしているから、私もたたかっているんだよ、という思い。</p> <p>◎たたかっているものがとても大きな問題で、何度もぶつかることがあるだろうから、「一人じゃないんだよ」と、不安にさせないようにしている。</p> <p>◎ムタレさんはこの現状を変えたいと思っていて、スラムの子たちがそこでへこたれてしまったら、今の社会を変えることができないから、お互いに頑張っていこうという気持ち。</p>	<p>ることで、「私」の生活の中にある差別問題に視点をあてることができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ムタレさんの言葉の真意を想像し、ムタレさんとスラムの子どもの思いについて考える場を設けることで、それぞれの気持ちに寄り添うことができるようにする。</li> <li>・個人で考えた意見を班で共有し、より多様な意見と触れあう場を設けることで、現在の社会構造を多面的・多角的に考えることができるようにする。</li> </ul>
	<p>4 公正・公平に過ごせる社会の構築のための「私」の考えをまとめる。 【個人・全体】</p>	<p>たたかわなくてはいけない世の中について、「私」はどう考えるか。</p> <p>◎歴史を辿ると、権利を手に入れるにはたたかうことも必要だと思う。でも、たたかうことになった前提には、不平等さがあったわけだから、その不平等さを解消していくことが大事なのだと思う。私たちは、前提が違うのだから、誰もが同じ感覚、同じ条件で生活しているわけではないということを考える必要があると感じた。自分と同じ感覚で考えてしまうことが、差別を生み出す原因になっていると思った。</p> <p>◎はじめは、差別に対してたたかっていくという言葉を受け入れていたけど、たたかわなくてはいけない世の中を作っていること自体に問題があるんだと思った。このたたかいは、私たちの差別する心によって生まれているのだから、違いを取り上げて攻撃するのではなく、多様な違いを認めていくことが大事。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・差別や偏見がある現状を踏まえ「たたかわなくてはいけない世の中について、「私」はどう考えるか」と尋ね、視点を『私』にもっていくことで、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲を高めることができるようにする。</li> </ul> <p>被差別者が差別されない世の中を築くために、不平等な社会の構造に着目しながら、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができたか、発言や学習カードの記述から評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・差別が生まれる社会構造には、視点が向いている生徒には、「それ（社会構造）に対して『私』はどのような考えが必要だろう」と尋ねることで、問題に対する自分の思いや考えに目を向けることができるようにする。</li> </ul>

## 07 板書計画



## 08 評価規準に基づく本時の評価方法

被差別者が差別されない世の中を築くために、不平等な社会の構造に着目しながら、誰もが公正・公平に過ごせる社会を実現させようとする意欲をもつことができたか、発言や学習カードの記述から評価する。

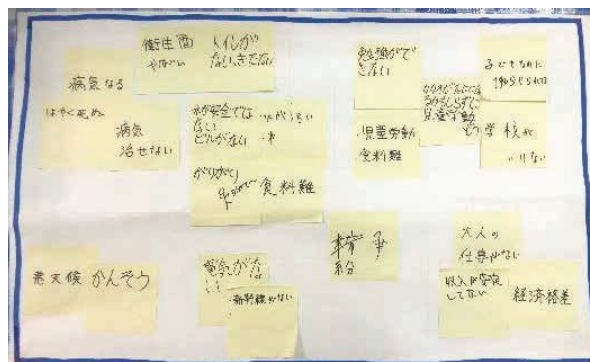
## 09 学校外との連携

NPO 団体「礎の石孤児院」より、ムタレ桜子さん

## 10 学びの軌跡

### ・既習の知識をもとに、途上国が抱える問題について考える S 生（第 0 時）

単元が始まる前の 7 月、途上国が抱えている問題について、S 生（3 年生）は、児童労働、食糧難、悪天候、経済格差、衛生面など、複数の要素を挙げた。一方、K 生（1 年生）は、児童労働、学校に行けないなど、比較的狭い要素で問題を指摘していた。3 年生は、社会科の地理的分野だけでなく、公民的分野、歴史的分野などから途上国を捉えることができるようになってきているのに対し、1 年生は地理的分野の中でも、ガーナにおける児童労働の知識が、途上国を捉える手がかりになっていることが分かる。各班で挙げた問題について関係性を求めると、S 生はこれらの付箋を衛生面、天候、インフラ、経済、教育、平和の 6 つの領域に分けて配置した。このことから、それぞれの問題が独立していると考えていることが窺える。一方、それぞれの問題はつながっており、「ゆえに、お金があれば解決できる」と考えている他の班の A 生（2 年生）の意見を聞きながら、S 生は納得いかない表情を見せた。S 生は、これらの問題がお金で解決できるものではないことをどこかで感じているのだろうと授業者は捉えた。



途上国が抱える問題を挙げ、グループ分けした場面

・「そのこ」の心の中を知りたいと考える S 生（第 1 時）

谷川俊太郎の「そのこ」の詩の一節から、「そのこ」が守られていない権利を考える中で、S 生は、A グループの仲間と「休み、遊ぶ権利」や「教育を受ける権利」、「生活水準の確保」などの権利を挙げた。その後、B・C グループの仲間と考えを共有すると、「健康・医療への権利」や「プライバシー保護の権利」「適切な情報の入手の権利」など様々な権利が挙がる様子から「確かに。それもそうだね。」と納得し、「そのこ」の生活全体を見ることで、それぞれの権利が関連して守られていないことに気付いていく姿があった。また、そのこの未来のために何ができるか考える中で、「より大きく課題化して国や世界を巻き込んで援助する」という記述から、「そのこ」が抱える問題の大きさを推測し、改善していくには、社会的な仕組みを作ることが必要であると考えていることが窺える。その仕組みを作るには、自分たちの考えだけでなく、当事者の思いに寄り添うことが必要であるということにも着目していることが分かる。

現実的に言えば自分か何かの法人に入ってこの問題についてより大きく課題化して国や世界を巻き込んで援助する。そのこの場所に行ってそのこに将来の事を聞いたり自分か様々な選たくしを教えてあげればいい。又大人の意見を聞いてあげるのも大人の目で大人にも様々な選たくしを教えてあげる。



守られていない子どもの人権について考える姿

・ゴミ山にいる「私」から、途上国の問題だけでなく、日本にも様々な問題があることを述べる S 生（第 2 時）

第 2 時は、ジグソー法で、子ども同士の対話を通して主体的、協働的な取組をねらった。しかし、情報量が多く、互いの情報を共有することに時間がかかったことや、何をもって考えが深まったかという教師の見通しの甘さも原因となり、考えを十分に深めていくことができなかった。S 生の「私たち日本人とはかけ離れた世界の話だった」という記述から、途上国の問題を理解するものの、日本には日本の問題があり、私たちにとって優先すべきことは自国の問題であると考えていることが理解できる。もちろん、国際支援も大事であるが、自国の問題改善に視点を向けることは当然である。一方で、これまで当たり前と感じていた日本の経済面や衛生面の安定性に着目していることは、他国との比較を通して生まれた視点であり、日本を多面的・多角的に捉えてきた姿であると言える。

改善策  
 ・税金を高くする → 金銭自由に生活できない  
     ↓  
     借金 寄付を募る  
 ・沢山の人が働ける場所をつくる  
 ・行って意見を聞く  
 ・ゴミ出しについて教えてあげる



個人の考えをグループで共有している場面

私たち日本人とは、かけ離れた世界の話だけれども、自分がこうなると考えると嫌な感じになってくる。ザンビアは、資源も技術もなく、ゴミの山がいっぱいできてしまうことが分かった。日本では、働く場所も収入も税関がなくて、国民の税金といふものがあつて、保たれている人だなと思つた。支援したい気持ちは山々だけれど、私も日本も、そうは言えないと思つた。

2023.04 → 2024.09  
 障がい施設 → 日本へ支援 (2023) 4/21 → 9/16 → 10/10  
 全員のみんなが仲良く  
 ↳ 2/21/24 日本へ 先進国の支援  
 負のループ  
 ① 障がい施設をやる (支援 2023) → 家庭の収入が少なくて  
 障がい者 2023 2024 5/25 後行  
 2023  
 ゴミをもち帰  
 ↳ 船を利用 → 船

他の班の考え

・ザンビアの中学生の思いを知り、心の距離の縮まりを実感する S 生（第 3・4 時）

子どもたちは、これまでと違う見方で日本を捉えるようになってきたことを感じ、授業者は日本の問題点や日本のよさについて質問した。すると、下記のような要素が挙げた。少子高齢化や過疎化

は子どもたちが生活している大岡と深く関係していることや、昼食時に見ているNHKニュースや国会中継で話題になるため、日本の問題点として捉えていることが窺える。日本のよさについては、平和や治安のよさ、水が飲める、みんなが教育を受けられるという声が挙がった。H生（1年生）は、「親が子どもを学校に行かせられない状況が他の国にはあったから、日本はちゃんと親が学校に行かせてくれるから、そこがいいところ。」と答えた。1年生らしい答えであるが、前時までの途上国の問題を意識しながら、自国のよさを捉えているのだと考えられる。授業者は、途上国のよさについて尋ねると、S生は「なんとなく分かるけど…」と言葉を濁した。また、A生（1年生）は1～2個挙げても、住んだことのない国・訪れたことのない国のよさを具体的にイメージすることはできなかった。S生は、第1時から、その場所に行き、本人の声を聴くことの必要性を感じていた。そのため、授業者の「どうしたら分かるかね。」という問い掛けに対し、S生は「実際に聞いてみる？」と答えた。遠くのザンビアにいる子どもたちと交流できると思っていなかった大岡中の子どもたちは、授業者の期待以上に交流への興味をもった。

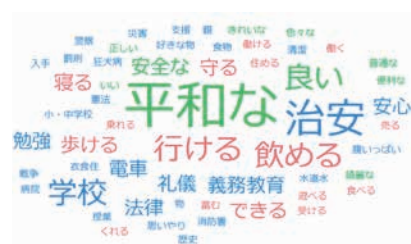
次に、子どもたちはザンビアの子どもたちに聞きたいこと、ザンビアの子どもたちに伝えたいことの2つの側面から、様々な項目を付箋に書き出した。自分たちが住んでいる大岡のことや、日本とザンビアの学校のことなどを皮切りに、ザンビアの男女の役割（性差別問題）や、ザンビアがこれからどんな国になってほしいかなど、ザンビアに住む人たちの心に触れた質問も考えた。S生は、H生（1年生）とペアになり日本とザンビアの学校をテーマに質問を考えた。



シイタケを紹介する姿



日本の問題点



日本のよさ

S生とH生は日本の義務教育制度や定期試験、学校嫌いの人がいることなどを説明することに苦戦していた。直訳しても伝わらない可能性や、誤解を生む表現に気を配る姿からは、相手意識をもって活動していると言える。また、大岡中学校で栽培しているシイタケを披露するなど、興味をもって聞いてもらう工夫を考えた。他の班では、三線の弾き語りや日本舞踊の扇子を紹介するなど、日本の伝統文化を守っていこうとする自分たちの思いを伝えながら、ザンビアの伝統について質問をした。S生の振り返りからは、交流し、互いの思いを伝え合うことができた喜びと、ザンビアの子どもたちの夢を尊重する気持ちが表れていることを読み取ることができる。第2時では、自分とかけ離れた世界のことと捉えていたS生であるが、ザンビアの子どもたちの平和を願う気持ちに頷いていたことから、日本が平和を願うように、自分たちと同じであることを実感していた姿だと授業者は捉えた。さらに、自分の知っている英単語、準備してきた英語表現を使い、頑張ってコミュニケーションをとったという経験により、ザンビアの子どもたちとの心的距離の縮まりを感じていた。

自分たちだけが知っていること、相手しか知らないこと、それは、実際に話してみないと分からないことでもあると思った。違いがあるから、話したい(伝えたい)ことか、沢山挙げたし聞きたいことも沢山挙げたのでとても面白いと思った。次回、日本に興味をもってもらえるように、しっかり伝えたい。

第3時のS生の振り返り

ザンビアの子と話してみても正直難しく大変だった。でも相手も自分も笑顔で話すことや聞き取ろうとしたり、伝えようと努力することか、分からなくともコミュニケーションの一歩だと思った。中学生(試験やいる人)だから頭も良かったし、一生懸命聞いてくれた嬉しかった。将来の夢や望みなどしっかり答えてくれたし、本当にその夢などかかかってくるといいと思った。

第4時のS生の振り返り

### ・差別問題における自分の立場を改めて考えたS生（第5時）

授業冒頭で、交流前の振り返りと交流後の振り返りを返却したことで、子どもたちは、自分の心の変化を客観的に捉えることができた。子どもたちは、「挑戦したいことがあって素敵だった。」「積極的で明るかった。」と、ザンビアの子どもたちへの思いを話した。

授業者は、研修中に感じたモヤモヤと、同じモヤモヤを子どもたちと共有したいと思い、第3時に扱った資料をもう一度提示し、孤児と孤児でない子どもが同じ学校で勉強をしていくことについて、感じたことを聞き出した。すると、S生は「お金を払える人と、そうでない人の関係性が気になる。」と授業者が危惧した差別のモヤモヤと同じことを述べた。前時の交流を支えてくれたムタレさんにつながりができている子どもたちは、差別について語られた動画を真剣に見つめ、子どもたちが教師にいじめられている現実があることを知り、驚いていた。その後、子どもたちはザンビアの子どもたちと同じ差別の仕組みが、「私」の周りにもあることに気づき、ジェンダーや病気などの差別問題を挙げた。授業者は、ジェンダー差別の当事者や女性などが同等に扱われていない仕組みが社会にあることに気付いた意見を全体で共有したが、これらの問題について、さらに問い返したり、他の子どもに尋ねたりして、掘り下げることをしていけば、自分自身もたたかわなければいけない人になる可能性があるということに気づき、最後の問いをより具体的に考えることができたのではないかと省察した。



ムタレさんのインタビューを見る場面



教師のモヤモヤを共有している場面

S生は中心発問において、「分かっていない人のせいで」という言葉を使ってムタレさんの思いに迫っていった。授業者は本時、単元名である「『私』のこと知ってる？」の「私」を、大岡中の子どもたちを示す言葉として授業を計画していた。なぜなら、差別や偏見などしていないと思っている、今までの「私」が、実はS生の言う「分かっていない人」であることを自覚し、自分の中にある差別意識に着目させたいと考えていたからである。そこで、授業者はS生に「分かっていない人って誰のこと？」と問い返した。子どもたちの視線が授業者に集まったことから、子どもたちは、この言葉の意味を理解し、自分自身に向けられた言葉であることを感じ取ったように見えた。S生は「(動画)の学校の先生とか…こういうことを知らない人とか…」と自信なく答えた。その後、M生(3年)は「私は、今までアフリカに対して、怖いイメージがあったけど、交流してみて全然そんなことなく、たぶん自分は今まで分かっていない人だったけど、この授業で、ちょっと分かっている人になったんだと思う。」と答えた。さらに、R生(1年)も「分かってないわけじゃないけど、分かっている！というわけでもない…」と答えた。この発言を真剣に聞いていたS生は、ワークシートに「世の中に流されずに自分を保てる人になりたい。自分を相手に置き換えるのも大事」と記入した。イメージや偏見で世の中を見るのではなく、自分で判断できるように考えていきたいというS生の思いを読み取ることができる。さらにS生は「正しいがあるたかひの中で、正しい方にいたのに、否定されて不利になって、それが変えられない事実についてだとしたら、それは違うと思う。」と述べた。性別や出身、身体的

特徴など本人の努力によって変えられないことで、不利な状況に立たされ、たたかわなくてはいけない被差別者がいる社会の仕組みは間違っていると考えていることが読み取れる。

2 「私たちが戦うよ」には、ムタレさんのどのような思いが込められているのだろうか。

自分が差別を受けた、受けてないに関わらず、差別自体良くないと思っている。小・中学校まで成長してきた子は少なくとも今まで自分を持って生きていた子たちだから大丈夫だと思っている。
苦しいのは、分かっていない人たちのせいなので、その人たちのせいで子どもたちの人生をくわしてほしくないし、サポートしたいと思っている。



気付いていなかった意識に気付いた M 生

## 11 海外研修で何を学び、どの部分を見童生徒に伝えようと思ったか

指導観に記載

## 12 苦労した点

授業者は、世界で起きている様々な問題を人権教育の視点で学習する授業を考えていたが、単元の中で、子どもの考えや子どもの感じ方の変容を捉えることの難しさを予感していた。なぜなら、差別を悪とし、国際協力を支援することは、人権教育の視点および、道徳的価値として誰もが分かっていることであり、「差別や偏見は悪いことで、自分は差別や偏見をしないようにしたい。」「途上国の問題は途上国だけの問題ではないから、実情を知り、自分に何ができるかを考えていきたい。」と答えるのであれば、それは至極表面的で、深く考えた姿ではないと授業者は考えていたからである。しかし、国を越え、世代を越えて課せられた規模の大きな問題に対して、それ以外にどのような言葉で子どもたちが自己の考えを表現できるのか、また、言葉としての表記は同じでも、授業を通して、感じ方や考え方が深まっていると判断するのなら、授業者は子どもの変容を捉える軸を明確にもっていないと評価ができないと感じていた。

自己を見つめ、これまでの自分の考え方と変わってきている自分に気付いたり、それまで気にしていなかったことが気になるようになったりしている子どもの姿を、授業者が見逃さずに捉えるためには、子どもの思いを顕在化させ、議論したいと思える「材」と出会わせることが必要であった。海外研修で授業者が出会った様々なひと・もの・ことはどれも印象的であるが、自分のもつ特権（ある社会集団に属していることで労なくして得る優位性）を普段から意識せず、差別や偏見を受けることの少ない子どもたちが、人権侵害を受けている人の生活や、向き合っている問題を考えることは、想像の範疇を越え、手がかりのない状態を作り上げてしまうことが予想できた。単元を通して、各時間で設定した「私」の思いを想像するためには、どうしても知識的側面が必要になる。しかし、知識を増やしていくと、比重がそちらに傾き、「私」の思いに寄り添ったり、「私」を自分に投影したりする側面が薄くなり、人権教育を道徳教育に位置付けた前提から外れることが懸念された。世界の問題について考える社会科の要素、自己の考えを言語化していく国語科の要素、文化の違いを尊重し、共通言語でコミュニケーションをとろうとする英語科の要素など、他教科と関わり合っていることから、教科横断的な学習形態と捉え、総合的な学習の要素の強さを感じるようにもなった。教科ごとに設けられた見方・考え方を授業者が正しく理解していないと、教科性から逸脱していることに気付かず、評価基準がぶれてしまうこととなる。このようなことから、授業者は、道徳という教科の特徴に重点を置きながら、分断や差別のない社会の実現をしようとする意欲を育てる人権教育の単元展開に苦労を要した。

## 13 改善点

仲間の発言を受けて、個の考えが刺激され、変化していくような関わり合いが生まれる手立てを増やしていくと、自己の考えの変容に子ども自身が気付くことができると考える。

## 14 成果が出た点

異学年で班を組んだことで、1年生では出てこない視点をもてるようになったり、3年生が1年生のために、自分の意見を分かりやすく伝えたり、意見を言いやすい環境を作ったりするなど、子ども同士の学び合いができた点。

自分事として考えにくい遠く離れた国のことであるが、オンライン交流をすることで、子どもたちの心に、ザンビアの子どもたちとのつながりが芽生え、自分とは異なる境遇で生活している相手でも、その思いを想像し、寄り添うことができるようになっていった点。

被差別者が社会の中でたたかっているものについて考えることで、自分のまわりにある差別の構造に着目することができたことや、被差別者と差別者の関係を考える中で、自分の中にある差別心と向き合うことができた点。

## 15 自由記述

### JICA教師海外研修「多様性」グループで参観した教師の声

- ・生徒たちは独自にもっていたイメージを、前時までの交流体験によって肯定的な印象に変化させていたが、本時の「材」は、「教師がスラム出身の孤児の子をいじめる」という衝撃的な事実を生徒に示すものであり、現実を知った生徒たちは他人事ではなく自分事として捉えやすかったのではないかと考えた。道徳科において重視されている自分事として考える上で、授業者の「自分たちのまわりには（同じような問題は）ないのか」、「自分（立ち位置）はどちらなのか（どこなのか）」という問い返しが、ポイントになっていた。
- ・本時は、ムタレさんのインタビューの中で「教師も貧困な人をいじめる」という言葉に子どもたちは静かに衝撃を受けていた。前時には実際にオンラインでザンビアの子どもたちと交流をしていたこともあり、「遠くの『あの子』ではなく、「私の知っている『あの子』」になっていたことが強く影響していた。ムタレさんの「私たちも一緒にたたかうよ」というメッセージを受けて「私もムタレさんのように差別を受けている人のサポートをしたい」という生徒と「なぜ差別が起きてしまうのか」という社会構造に目を向ける生徒として、『あなたはどこにいる』という授業者の声掛けが、子どもたちを自分事＝「わたしはどこにいる」を意識するきっかけになっていたと考える。自分が無関係でない、この授業がなければ分からないままだったと振り返る記述から、授業者が伝えなかった思いが子どもに伝わっていることが読み取れた。

### 長水南部支会人権教育研究授業を参観した教師の声

- ・実際に現地に臨んで授業者が体験したり、見聞きしたりしたことが、授業のバックボーンになっており、加えてオンラインで現地との授業を仕組んだことで生徒にとって、身近な事として考えを深める機会になっていた。
- ・「たたかう」とはどのようなことなのかを、自分でも考える機会となった。子どもの中でも色々な「たたかう」姿のイメージがあり、負けないことも差別をなくすことも、知ることも「たたかう」であり、この考えを交換してもさらに深まりが出ると感じた。
- ・オンライン交流のように、実際に相手と会って、言葉を交わし、理解し合うことが、差別をなくし



ていく1歩になると感じた。

- ・教師の実態と授業者の願いの両方が関係し合った題材であり、単元展開であった。中心発問「『私たちも一緒にたたかうよ』には、ムタレさんのどのような思いが込められているのだろう。」は、多面的・多角的に社会構造のマイナス面を捉えることができるものだったと思う。自分が社会（世界）をどこから見るかによっても変わるし、社会科で捉えたザンビア（アフリカ）という国を、道徳科の視点で捉えることでも、多面的・多角的の捉えは変わってくるだろう。



事後研究会の様子

## 参考資料・使用教科書

子どもの権利条約カードブック	国連子どもの権利委員会委員（監修）
世界中の子どもの権利をまもる30の方法	認定NPO法人国際子ども権利センター（編） 甲斐田 万智子（編）
ぼくは12歳，路上で暮らしはじめたわけ	国境なき子どもたち（著）
風をつかまえたウィリアム	ウィリアム・カムクワンバ（文） ブライアン・ミーラー（文） エリザベス・ズーノン（絵）
風をつかまえた少年	ウィリアム・カムクワンバ（著） ブライアン・ミーラー（著）
パヤタスに降る星	山口 千恵子（文） 葉 祥明（絵）
そのこ	谷川 俊太郎（詩） 塚本 やすし（絵）
真のダイバーシティをめざして—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育	ダイアン・J. グッドマン（著） 出口 真紀子（翻訳）
差別はたいてい悪意のない人がする	キム ジヘ（著） 尹 怡景（訳）
2030年の世界地図帳 あたらしい経済とSDGs 未来への展望	落合 陽一（著）
JK，インドで常識ぶっ壊される	熊谷 はるか（著）
本当の貧困の話をしよう	石井 光太（著）

# ザンビアを学ぶ・ザンビアから学ぶ

## 【実践者】

氏名	梅村 唯斗	学校名	群馬県高崎市立矢中中学校
担当教科等	社会	対象学年（人数）	2年 全クラス（117名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023年 10月25日～11月17日（4時間）		

## 実施概要

### 01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

### 02 単元名と単元目標

**単元名：**ザンビアを学ぶ・ザンビアから学ぶ

**単元目標：**ザンビアの状況を通して、今までの日本の見方と違う見方を獲得できるようにする。

**関連する学習指導要領上の目標：**

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。

### 03 単元の評価規準

①知識及び技能	探究的な学習過程において、課題の解決に必要な知識や技能を身につけ、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解している。
②思考力、判断力、表現力等	実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現している。
③学びに向かう力、人間性等	探究的な学習に主体的・協働的に取り組もうとしているとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとしている。

### 04 単元設定の理由・単元の意義

〈理由〉

失われた30年を経て、日本が「先進国」だと大手を振って言うことができない時代へ突入してきている。日本はいまや「課題先進国」と呼ばれ、先進国の中でも課題が山積している国といえる。しかし、この現状は日本で生活している日本人には簡単に実感することができない点であり、他国の状況と日本の状況を比較し、日本の状況をより客観的に把握することではじめて理解が可能となる。途上国の現状を知り、その現状と日本の状況を比較してみることで、より日本を客観的にとらえ、日本に対する新たな見方を獲得できると考え、本単元を設定した。

### 〈単元の意義〉

本単元は、途上国の現状を理解することを通して、今までの日本の見方とは違う見方を獲得することを目標としている。途上国の現状、特に自分が教師海外研修で見てきたザンビアという国の実情を通して、日本がどのような状況にあるのか、そして日本はこれからどのような意識を持つべきなのか、という点について、生徒が理解することを目指したい。ザンビアでは途上国としての課題がはっきりと目に見える形であらわれており、写真や動画を通してその現状や解決策について生徒が理解することは可能であると思われる。そして、そこから新たな日本の見方を獲得するために、「ザンビアでのプロジェクトを踏まえて、自分たちにはどんなプロジェクトができそうか？」という問いを投げかけたい。その問いを通して、今までの日本やこれからの日本のあり方を考えていけるのではないかと考えている。以上が本単元の意義である。

### 〈児童 / 生徒観〉

本校の生徒は、世界で起きていることに対して少なからず関心を抱いている。自分がザンビアへ行くことを告げ、文房具の寄付を募ったところ、多くの生徒が文房具を持参してきてくれた。しかし、その世界で起きていることと自分とがどのようにつながっているかについて深く理解している生徒は少ない。途上国の現状を通して、世界と自分とのつながりについて実感をともなって理解できるように促していきたい。

### 〈指導観〉

教師海外研修の体験を踏まえた指導を行っていきたいが、「学習する生徒は現地へ行っていない」という明確な点を踏まえた指導を心がけていきたい。こちらからの説明はなるべく控えながら、現地での写真や動画、諸資料を生徒が読み取り、そこでの様子がどうなっているのか、想像力をはたらかせながら、活発に意見や考えを出せるように促し、その考えをもとに生徒同士で議論をしながら、より深い考えを持つことができるような指導を心がけたい。

## 05 単元計画（全4時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	「ザンパ ラクイズで途 上国を知ろ う」	ザンパ ラクイズから、 途上国の現状を 理解す る。	○ザンビア・パラグアイについて知っ ていたことを書き出し、共有する。 ○ザンパラクイズに答えながら、ザンビ ア・パラグアイについての理解を深め る。 ○ザンビア・パラグアイについてもっ と学んでみたいことを書き出し、共有す る。	○「ザンパラクイズ」スラ イド資料
2	「ザンビ アとつな がろう」	ザンビ アの学生とのオ ンラインでの交流を通 して、途上国の現状をよ り深く理解する。	○お互いの生活についてスライドを用 いて紹介しあう。 ○スライドで学んだこと以外に気にな った点を質問しあう。 ○お互いの自国の文化を実際に見せ合 う（ダンス・合唱）。	○紹介用スライド資料
3 本時	「ザンビ アの現状か ら日本を 学ぼう①」	ザンビ アの現状を、「ナ カラプロジェクト」 「きれいなまちプロジ ェクト」「丸森町プロジ ェクト」の3つの JICA のプロジェクトを中心 に理解する。	○知識構成型ジグソー法により、以下の 学習を行っていく。 ①今までの学びで思い描くザンビ アのイメージを書き出す。 ②エキスパート活動を通して、3つの 活動についてより深く理解していく。 ③ジグソー活動により、3つの活動の	○研修時の現地での写真 ○学習プリント

			内容を共有し、どの活動がザンビアにとって最も必要な活動か、班で話し合う。	
4	「ザンビアの現状から日本を学ぼう②」	ザンビアでの3つのJICAのプロジェクトを通して、今までの日本と違う見方を獲得できるようにする。	○知識構成型ジグソー法により、以下の学習を前時から引き続き行っていく。 ④クロストークの時間を通して、班の意見を共有する。 ⑤クロストークまでの活動を踏まえて、自分たちの身近でどんなプロジェクトができそうか、班で考える。 ⑥すべての活動を振り返り、新たに気づいたことや感じたことを書き出す。	○研修時の現地での写真 ○学習プリント

## 06 本時の展開（3時間目）

**本時のねらい：**ザンビアの現状を、知識構成型ジグソー法のジグソー活動までの学習を行いながら、「ナカララプロジェクト」「きれいなまちプロジェクト」「丸森町プロジェクト」の3つのJICAプロジェクトを通して理解する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	○本時の学習内容をつかむ。 ・今までの学びで思い描くザンビアのイメージを書き出す。 ・教師の説明から、JICAという組織が国際協力活動を行っていることを知る。 ・教師が視察してきた3つのプロジェクトを簡単に説明しつつ、「ザンビアの現状はどのようなものか？」という本時の課題をつかむ。	・写真や動画を活用して、現地での活動をイメージしやすくする。	・研修中に撮影した写真 ・学習プリント
<b>本時の課題「ザンビアの現状は、どのようなものか？」</b>			
展開 (35分)	○知識構成型ジグソー法のジグソー活動までの過程を通して、ザンビアで行われているJICAの3つのプロジェクトについて理解する。 ・3つのプロジェクトをより深く理解するために、エキスパート班に分かれて、それぞれのプロジェクトの資料を読み取っていく。 ①どんな課題がありそうか？ ②課題の解決のためにどんなことをやっているそうか？ ③課題が解決するとどんなよいことがありそうか？	・教師が自ら説明することは極力避け、生徒が質問してきた内容についてのみ答えるようにすることで、生徒が自分自身の力で資料を読み取れるようにする。	・研修中に撮影した写真 ・学習プリント

まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジグソー班になり、プロジェクトの内容を共有したうえで、どのプロジェクトが最もザンビアに必要なと思うか、班で話し合う。</li> </ul> ○本時のまとめを行い、次回の学習の見通しを持つ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回の学習の連絡を行い、本時の学習が次回の学習へどのようにつながるのか、その見通しを持つ。</li> </ul>		・学習プリント
-------------	---	--	---------

## 07 板書計画

なし

## 08 評価規準に基づく本時の評価方法

知識及び技能において、ザンビアでの課題やその解決策を、資料から適切に読み取れているかどうか、学習プリントの記述内容から評価を行う。

## 09 学校外との連携

特になし

## 10 学びの軌跡

単元最後の授業での振り返りの記述を載せる。

ザンビアにはさまざまな課題があることがわかった。その課題を解決するためにさまざまなプロジェクトがあることがわかった。ザンビアの人と、日本人と協力して問題を解決することは大切だと思った。

日本とザンビア 協力して  
課題を解決しているから  
いいなと思いました。

以上の記述のように、ザンビアと日本が協力して課題解決に向かっていくとよいという内容が書けていた生徒がいたのはこの授業の成果といえよう。

ザンビアでは、様々な問題を解決するためにいろいろな活動をして、ザンビアをより良くしようとしていることがわかった。また、ザンビアで行われている活動はどの国でも必要な考え方であり、応用できると思った。

教育の遅延や産業の発展が様々な課題を解決することかできると知りました。  
ザンビアは課題がたぐい人あふけし、日本もたぐい課題があることを知りました。

日本とザンビアは全く違う国のようで、実は似ている部分がある、なにかザンビアは日本に、日本はザンビアに学ぶことがあるのでは  
ないかと考えた。

また以上のように、お互いに協力するという内容までいかないまでも、日本はザンビアから学ぶ必要があるという内容の記述も多かった。

ザンビアは色々不足している国だと知った。

ザンビアはゴミの量が多かったので処理したほうがいいと思った。

しかし、以上のようなザンビアの課題にのみ注目した記述も多かった。次回への課題としたい。

日本は住みやすい国なのは知っていたけれど、ザンビアには日本に比べると色々な課題があり改めて日本は住みやすい国だと思った。

日本がすごいと羨望しているが逆に発展している国を支援する必要があることがわかった。

また、以上のように「日本はとても過ごしやすい国」「自分たちがいかに幸せかということがわかった」などの、今までの日本の見方と変わらない内容も多く見受けられた。

ザンビアは、教育や環境があまり発展していない国、ということを知ることができました。  
少しでも貢献していけたらいいなと思います。

ザンビアには、様々な課題があることに気が付きました。  
そして、それを解決するためにプロジェクトをしていて、自分にも貢献できることがあればいいと思った。

以上のような、途上国のために自分たちにできることをしたいといった内容もいくつか見受けられた。一方向的な国際協力の見方になっている記述で、こういった記述の生徒の国際協力・国際支援の見方をいかに双方向的な見方に変えられるかは今後の課題といえる。

ザンビアにはさまざまな課題があり、それを解決することはとても難しく、さまざまな観点から見ると笑ってしまうものもある。また、文化の違いについて感覚的にわかりづらいものもあるのだ；ザンビアの人たちの気持ちに理解するのは大変だと思った。

また、わずかではあるが、自分のものの見方を客観的にとらえる必要性に言及している生徒もいた。こういった記述の生徒が、今後日本を様々な視点で見えていけるように、こちらからも働きかけをしていきたいと感じている。

## 11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修で特に学んだことは、日本が今どういう状況なのか、ということを経験から見ることの大切さである。ザンビアの課題をこの目で見たときに、結局同じような課題を日本も抱えているということ、そして、その課題の解決には、途上国・先進国といった垣根をこえた国際協力・国際支援が必要であるということを感じた。生徒たちには、自分たちが持っていた今までの日本の見方が「先進国としての日本」という偏った見方であったということ、そして、国際協力・国際支援というものは決して一方向的なものでなく、双方向的なもので、途上国も先進国もお互いに共通の課題を解決するパートナーであるという認識を持たせられるように促したいと思い、実践に臨んだ。

## 12 苦労した点

海外研修で学んだことを材料に授業をするときに、実際に体験してきた自分と、自分の目で見えない生徒との間をどのように埋めたらよいか、という点が一番苦労した。授業の初期段階の構想では、もっと写真や資料を増やし、教師からの説明も多くする予定だった。しかし、様々な方々からのご意見で、こちらが語れば語るほど生徒たちは引いていってしまう、という重要な事実気づかされた。そこからは、いかに授業で使用する資料を絞るべきか、という点に多く時間を割くようになった。

こちらが意図する内容を生徒がつかめるような資料はどれか、またどのようなキャプションを入れたら、生徒の思考を促せるか、選定に非常に時間がかかった。

また授業実践全体を通して、関係者との日程調整も苦労した点である。授業見学の調整、リモート授業の調整、ザンビアとのオンライン授業の調整と様々な調整に時間をかけすぎてしまった結果、多くの方々にご迷惑をおかけすることとなってしまった。

## 13 改善点

苦労した点で先述したが、資料の選定に時間をかけた分、「もっとこの資料を使えば…」「もっとこのキャプションを入れたら…」という気持ちも大きい。知識構成型ジグソー法は、エキスパート資料の質で授業全体の質が大きく左右されるが、今回の授業も資料の選定にはまだまだ改善の余地があったと感じている。今後同じような授業実践を行うときは、さらなる資料の精選を行っていききたい。また、調整に時間をかけすぎてしまった点も、自分が不慣れであったということが一番の要因なので、この経験を生かして、次回からはより手際よく、効率的に調整を進めていきたい。

また、新たな日本の見方を獲得する目的で投げかけた「ザンビアでのプロジェクトを踏まえて、自分たちにはどのようなプロジェクトができそうか？」という問いが、その答え方の間口の広さゆえ、生徒を困惑させている様子が散見された。この問いは生徒の実態に応じて、どこまで初めから授業者側がプロジェクトの設定を行うのか（時間や場所、実現可能性など）という点が非常に重要な部分で、その設定を間違えてしまうと、生徒の思考が促されなくなってしまうということが今回の実践で明らかとなった。今後の実践では、対象生徒の実態をよく把握したうえで、適切な問いの投げかけを行っていききたい。

## 14 成果が出た点

生徒の様子と、学校全体の様子の2点に分けて述べていきたい。1点目は生徒の様子である。資料を精選したことで、生徒たちが活発に思考を働かせる活動にすることができたと感じている。日本の様子とかけ離れた状況の写真を目の前に、生徒たちは今までの自分の知識をフル活用させ、ザンビアの状況について思考を働かせていた。実践前は、「そもそも途上国とは？」という疑問を持っていた生徒たちが、途上国に対して主体的に関わるようになっていった点は大きな成果として挙げられる。

2点目は学校全体の様子である。学校全体の雰囲気にながら、「自分たちは途上国とつながっている」という雰囲気を作り出すことができたと感じている。職員に対しての研修報告会では、多くの先生方に参加していただき、たくさんの質問を受けながら和やかな雰囲気のもと行うことができた。また、他学年の先生方からも「研修で学んだことをぜひ生徒に伝えてほしい」と依頼を受けた。さらには、学校図書館指導員の先生にも「そういったコーナーをつくらないか？」とお誘いを受け、非常に簡易的ではあるものの、図書館の一部に海外研修の学びを踏まえたコーナーを設置していただいた。そのような形で少しずつではあるが、学校全体に国際協力・国際支援の雰囲気が広めることができたと思う。

## 15 自由記述

今回の研修の1番の成果は、なんといっても同じ志を持つ仲間に出会えたことである。なかなか身近に国際協力などに興味を持っている教師は少ない。自分がやっていることが間違っていたり、正し



くないのではと考えてしまったりすることも多い。そのようなとき、相談できたり、共に課題を共有できたり、課題解決のための授業づくりを共に行ったりできる仲間がいることはこの上なく心強いし、有り難いことである。帰国後、授業の構想を練っていく際も、チームのメンバーをはじめ、多くの方々にご協力いただきながら、少しずつ進めていくことができた。そういったつながりがなければ、今回の研修は成立しなかったということをはっきりと感じている。今回できたこのつながりは、これからの教員人生の宝となるものである。このような宝を与えてくれる貴重な経験の場を用意していただいた JICA の皆様に本当に感謝したい。

## 参考資料 (エキスパート活動で使用した写真)

### 資料 A：きれいなまちプロジェクト（廃棄物最終処分場での国際協力事業）



資料B：ナカララプロジェクト（経済的に困難を抱える地域でのコミュニティスクールでの活動）



資料C：丸森町プロジェクト（宮城県丸森町による、現地の小規模農家に向けた草の根事業）



【 評 論 】

「国境を越える言葉」 および 「未来世代への責任」

【実践者】

氏 名	渡邊 千恵	学校名	埼玉県立所沢西高等学校
担当教科等	国語科	対象学年（人数）	2年 3組（40名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023年 11月20日・21日（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

論理国語

02 単元名と単元目標

**単元名：**【評論】「国境を越える言葉」 および 「未来世代への責任」

**単元目標：**言葉と創造についての思考を深める・近現代の視点をもたせる

**関連する学習指導要領上の目標：**

今後の国際化社会においてどのような力を身に付けていくべきかを自分の言葉で述べるができる。

03 単元の評価規準

①知識及び技能	現在の自分にはない視点を積極的に取り入れ、のちの自己表現の素材として生かすことができる。
②思考力、判断力、表現力等	論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
③学びに向かう力、人間性等	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈理由〉

JICA 教師海外研修に参加し、「発展途上国」と「先進国」という区別とその上下関係の概念がいかに平面的な考え方がわかり、日本のように将来海外の労働力を必須とする国として、変わり続ける世界情勢においてそのような考え方は意味がないと学んだ。所沢西高校の生徒は普段から海外の情勢や様子を知る機会は少ない上に、子どもの頃からの教育により、「日本は途上国を助ける存在・与える存在」という考えが根強いと思われる。今回のように、身近な人間がアフリカに行き、実際に経験

したことを伝える機会を利用して、あらためて個人個人の中に根ざしている偏見や途上国に対する考えに気づき、今後どう自分のマインドをセットしていくのかを考える機会にして欲しい。また、国語科教育の大きな目標のひとつは、「自己の考えを深め、他者と共有し、表現していくこと」だと考える。閉じた問いに対して決まった答えを示していく力だけではなく、開かれた問いに対して、自分の立場を示しながら、自己の見方を言語化する能力がここでは求められ、今後の国際化に向けて英語をツールとした意思交流の能力と同じくらい大切なものだと認識している。今回の大きなテーマをよい契機として、自分のことばで考え、他者にヒントをもらいながら広げ、表現するというプロセスを踏ませていきたい。

### 〈単元の意義〉

生徒それぞれが自身の答え、あるいはその手がかりとなる「見方」を手に入れ、授業参加者と共有することで学びを深め、まわりにつながっていける足がかりを掴むことで、今後の世界を生きるためにはどうするのかを考えることができる。

### 〈児童 / 生徒観〉

授業担当である教員に対して、授業の目指す方向を理解し取り組んでくれる、協力的な生徒たちである。クラスメイトとは大体どの人物とも会話することができるため、グループやペアワークの雰囲気はあたたかい。また、発言を促した際にはできる範囲で返してくれる。素直な生徒であるため、疑問を感じると表情が固まるし、つまらないと思われる授業では全体がすぐに眠気に包まれる。反応が直に返ってくるので授業者としても学びやすいクラスである。進路は基本的に4年制大学を目指す生徒がほとんどである。

### 〈指導観〉

今回の国際協力教育も普段の国語の読解力を育成する授業でも、授業者ばかりが喋って終わる聞くだけの授業ではなく、生徒と授業者が言葉を交わしつつ学びを深めていく「対話」の授業が理想だと考える。その際には授業者はファシリテーターに近い存在であることが望ましい。また、国語の授業は自分事にした概念や考えをいかに自分の言葉で語るかという、言葉を使った実技的側面が強いと思うので、今回の国際理解の授業においても、最後に「身に付けたい力」という問いを利用して、自分の意見・考え・見方を言語化する実技的要素を取り入れたい。

## 05 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	ザンビア フォトラン ゲージ	知らない世界を知ること で、「知る」「つなが る」大切さを実感し、 心の変容をはかる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* グローバルサウスへ自分がもっているイメージを振り返る</li> <li>* 4枚の写真から読み取れることを考える</li> <li>* 今後つながっていくべき人々との関係性を予測する</li> </ul>	ワークシート スライド (写真・動画) チテング
2	「つなが る」方法へ の考察	手段を考え、そのため にはどのような力をつ けていくかについて自 身の答えを形作る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* クラスメイトの感想・考えを共有する</li> <li>* 非言語のコミュニケーションについてケーススタディをする (ザンビアの方とのリモート交流・ザンビアやパラグアイの音楽やダンスでの交流動画等を通じて)</li> <li>* 今後の国際社会に向けてどのような力を身につけていきたいかを考える</li> </ul>	リモート交流 小論文課題シート スライド (写真・動画) チテング

## 06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：グローバルサウスに対してのイメージを変える・「助ける側」の意識から「助けられる側・今後助け合う立場」へと意識を変える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)
導入 (10分)	<p>～導入～</p> <p>□【発問】ザンビアなどのグローバル・サウスと呼ばれる国々に関して思い浮かぶイメージを、学校・衣食住・街の様子から問う。</p>	<p>□数名にその場で聞き、関連のある写真をいくつか紹介。魅力的なポイントにつなげて話をする。</p>	<p>ワークシート スライド (写真・動画) チテング</p>
展開 (25分)	<p>～本編～</p> <p>■ルサカゴミ最終処分場についての写真(フォトランゲージ) × 4 全体像→ゴミの様子→ピッカーの後ろ姿→スタッフ4名の姿</p> <p>□【発問】4枚の写真が表していることは何かを問う(4分個人思考→3分ペアワーク→全体共有・補足説明)</p> <p>■アウトリーチでの写真 (フォトランゲージ) × 3 陸橋の上下・ペットボトルを離さない人々・パンを受け取る人々</p> <p>□【発問】少年がもつペットボトルの意味</p>	<p>■写真が何を表しているか、ヒントのない状態で考えさせる。</p> <p>□生徒の気づきを聞きつつ、アウトリーチ活動の話や、麻薬のことなどを説明。</p>	
まとめ (15分)	<p>□【発問】ところで、日本社会ではどのような問題を抱えている？ →少子高齢化問題、経済の低迷、福祉の人手不足…</p> <p>■全体問いかけ 他者とかかわる姿勢は今のままでいいのか？ 非言語含めいろんな手段があるなか、私たちはもっと他者に開いていき、知り、はたらきかけることができるのでは？(時間があれば歌や音楽動画を一部紹介)</p>	<p>□今後さらに他国からの手を貸してもらわないといけない点・選んでもらえる日本になっているかの懸念を投げかける。</p>	

	<p>～最終課題～</p> <p>□【発問・記述】これからの日本とグローバルサウスの関係はどうなっていくか。また、私たちがすべきこととは何か。(感想・質問も問う)</p>	<p>【評価】記述シートを回収し、内容を確認。授業への積極性・何かを学ぼうとしている姿勢を評価する。</p>
--	---	--

## 07 板書計画

なし

## 08 評価規準に基づく本時の評価方法

小論文課題による評価（今後の国際化の進む社会においてどのような力を身に付けていきたいか）

## 09 学校外との連携

Kisha さん（国内の大学院留学生、事前研修にて JICA から紹介していただいた方）

## 10 学びの軌跡

### 生徒の感想

「今までグローバルサウスと少子高齢化問題は別物であると思っていたけれど、後者が進行してくると他国から助けを求めなければいけないと思い、グローバルサウスの方が急に身近に感じてきた」「今できることが何か考えたときに募金が思いついたけど、本当に募金で助けることはできるのだろうか？そのお金がストリートチルドレンに渡ったところで、買えるドラッグの量が増えるだけじゃないのかな？簡単に答えは出なさそうです」「戦争とかしていないでそのお金をもっとこちに回して欲しい」「国際社会についてよく考えてる政治家を選ぶ」「一人だけ特別なのはやめる」等、ザンビアでの経験を伝えたことで、刺激を受け、問いや想いを書いてくれた生徒が多くいました。また、埼玉県主催の産業フェスタでの国際理解ブースの運営や、海外留学へ興味をもってくれた生徒もいました。

## 11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

「途上国＜先進国」という世界の捉え方を変えていくべきということ。私たちはかつて途上国と呼ばれていた国々に助けをもらっており、これからさらに相互扶助・共生の必要な関係になる。そのなかで、どのような力を私たちは身に付けていくべきかを生徒と一緒に考えていきたいと思った。

## 12 苦労した点

研修で訪れたザンビアの抱える問題や現状を伝えることはできたが、そこから日本とつなげて「共創」的な概念まで導くことが難しく、生徒自身がその二つにつながりがもてていなかった。

## 13 改善点

上記については時数を増やすことで、たとえば一時間目は現状を伝えることにとどめ、二時間目に日本の現状を材料として問いを投げかけるなどして思考させ、三時間目に今後をどう生きていくべきかを各々でまとめてもらうなど、段階をきちんと分ければ対応できると考える。

## 14 成果が出た点

すべての生徒ではないが、一部の生徒からの振り返りで、「知ることの大切さ」や「どうすればいいかわからずもやもやするが考え続けたい」などの言葉が挙がっており、今後考えていくべき大きな問いを生徒数名と共有できたと思われる。

## 15 自由記述

一番の反省点は「ザンビアで起きていることは決して他人事ではなく私たちにもつながっている」という考えに辿り着けなかったことである。ここに至れば、非言語であってもコミュニケーションをとることは有効で、たとえ英語にはまだ不慣れであっても、音楽やダンスや身振り手振りなど、「わかりあおう」とする姿勢からできることはたくさんあることに触れられて、もっと話が広がったのではないかと思う。そのうえでザンビアやパラグアイの交流の動画を流せれば、より充実した時間にできたのではないか。

また、二時間目に特定のクラスでおこなったザンビア人のキシヤさんとのリモート交流授業では、端末トラブルのほか、生徒が英語でのやりとりに対して想像以上に遠慮してしまっていたこと、席の配置を配慮していなかったことで、まわりとの相談や話し合いができず、生徒に緊張を強いた状態が長く続いてしまったことがあった。こちらについてはもっと事前に生徒と運営の相談をしておくこと、英語がわからなくても気負わず積極的に言葉を投げかけやすい雰囲気づくりをしておくべきだったということが反省点である。

反省は多くある一方で、このような知らない世界についての話を楽しく聞いてくれた生徒が多かったことや、写真や動画を食い入るように集中して見てくれる生徒たちの姿を目の当たりにし、学校と外の世界をつなぐ授業が少しはできたのではないかと感じた。そしてともに海外研修に赴いた方々と、そのような生徒の学ぶ様子を見守ることができたことはかけがえのない経験となった。

今回の授業をエッセンスとして、これからも様々な国語の授業で「共創」や「越境」の概念を用いて、生徒と一緒にさらに思考を深めていきたい。

**参考資料・使用教科書：** 数研出版「論理国語」

# なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？ ～自分事として捉え、考える～

## 【実践者】

氏名	水澤 真也	学校名	新潟県聖籠町立山倉小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	6年2クラス（56名）
実践年月日もしくは期間（時数）	令和5年11月15日～12月1日（5時間）		

## 実施概要

### 01 実践する教科・領域

社会

### 02 単元名と単元目標

**単元名：**なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？ ～自分事として捉え、考える～

**単元目標：**パラグアイの文化や生活、教育の現状を通して、課題を自分事として捉え、課題解決に向け、自分の考えをもつことができる。

**関連する学習指導要領上の目標：**

- 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切に国を愛する心情、我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。

### 03 単元の評価規準

①知識及び技能	パラグアイの文化や生活、教育の現状を通して、お金の使い方や価値を理解するとともに、伝統工芸の価値や可能性、教育の意義を見いだすことができる。
②思考力、判断力、表現力等	パラグアイの各分野で抱える課題を自分事として捉え、自分なりの解決策を考え、発言したり記述したりしている。
③学びに向かう力、人間性等	世界の国の課題に興味関心をもち、進んで調べようとしたり、考えようとしたりしながら学習活動に参加している。



## 04 単元設定の理由・単元の意義

### 〈理由〉

子どもたちは、授業で世界の国のことを学んだり、日々のニュースや記事などから、たくさんの情報に接したりしているが、他の国の出来事を知ることがあっても、自分達の生活とは関係ないこととして「無関心」になり、受け流してしまいがちである。しかし、日本は世界の国々と密接につながっており、それぞれの国が抱える課題を「自分事」として捉え、課題解決に向けて考えていくことが、これからの時代を担う子どもたちにとって必要不可欠な資質・能力であると感じ、本単元を設定した。

### 〈単元の意義〉

自分達が住んでいる日本と、世界の国々は密接につながっており、世界の個々の国の課題がひいては日本の我々の課題として生活に関わっていることに気付かせるとともに、パラグアイの文化や生活、教育を扱う本単元の学習によって、「自分事」として捉える視野をもたせ、自分の考えを表現できる力を身に付けさせたい。

### 〈児童／生徒観〉

6年生の児童は、様々な分野に興味関心をもって元気闊達であるが、個々で自分の意見を発表するのは控えめで、どちらかといえば、人の話を聴きながら友達と協力して課題を解決しようとするグループ学習が好きな傾向がみられる。私は昨年、彼らが5年生のときに社会科を担当していた。特に世界の地理を扱った単元では、地球儀や地図帳を使いながら、世界の国々の文化や生活等について思いをさせ、好奇心旺盛に学ぶ姿が印象的であった。今回の実践にあたり、事前に学校の廊下に展示したパラグアイの写真や伝統工芸の実物などに触れ、授業開始前から興味津々の様子である。

### 〈指導観〉

本単元にあたり、子どもたちは興味関心こそあれ、知識についてはほとんど持ち合わせていない0の状態からのスタートになると想定されるため、1校時目でまず、「JICAとは何か？」から授業を行っていく。また、「自分事」をテーマにしているので自己開示が不可欠であることから、授業開始時に子どもたち同士で座席の班ごとに自己紹介のアイスブレイクを行う。その後、授業者の自己紹介も1校時目に盛り込み、緊張をほぐしながらその後の学習への興味関心をもたせたい。2校時目からパラグアイの内容に本格的に入っていく。最初に「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」について発問し、子どもたちの現状の考えについて個別に記述させてから、パラグアイの概要について見ていく。その後、3校時目の「金融教育」、4校時目の「伝統工芸ニャンドゥティ」の授業を経て、5校時目（本時）に再度「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」について問い直す。班ごとに意見を出し、話し合いながらまとめ、全体発表を行う。友達の様々な意見を聴きながら学習に取り組み、課題を「自分事」として捉えさせたい。最終的に課題を個に戻し、各児童の考えが当初の頃と比べ、どのくらい変容したか確認させるとともに、「教育の意義」について児童一人一人に明確な考えをもたせたい。

## 05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	JICAって何だろう？	JICAが行っている海外協力隊の活動内容や、JICA教	① アイスブレイクで、座席の班ごとに自己紹介を行う。 ② JICAとは何か？自分たち	・JICA国際協力機構ホームページ ・自己紹介用プレゼン

		師海外研修について興味関心を高めることができる。	<p>が抱くイメージについてタブレットのテキストに自由に記述し、提出する。</p> <p>③ JICA海外協力隊員の活動とJICA教師海外研修について概要を知る。</p> <p>④ 授業者の自己紹介及びJICA教師海外研修に参加した理由について知る。</p>	<p>テーション資料</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A4用紙（アイスブレイクの自己紹介用）</li> <li>・タブレット</li> </ul>
2	パラグアイはどんな国だろう？	日本から見て地球の裏側に位置する、パラグアイの国の概要について知り、興味関心を高めることができる。	<p>① 発問：「<b>なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？</b>」について、タブレットのテキストに自分の考えを自由記述し、提出する。</p> <p>② スライドショーを通して、パラグアイの国の概要について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師海外研修の現地研修で撮った写真、映像及び資料</li> <li>・伝統工芸のニャンドゥティ</li> <li>・テルモ（マテ茶セット）</li> <li>・パラグアイの現地通貨</li> <li>・タブレット</li> </ul>
3	金融教育「おこづかいゲーム」を体験してみよう	「金融教育」のゲームを体験することを通して、自分の金銭感覚に気付くとともに、パラグアイ人の金銭感覚やJICA海外協力隊員がなぜ金融教育をパラグアイで普及させようと活動しているのか考え、自分の意見をもつことができる。	<p>① パラグアイの「おこづかいゲーム」を説明する。</p> <p>② めあて「必要な買い物を済ませ、大切な人にプレゼントを贈れるだろうか？」を確認する。</p> <p>③ 班ごとに分かれ、ゲームを体験し、自分たちの金銭感覚について考える。</p> <p>④ パラグアイ人の金銭感覚を知り、JICAのパラグアイでの金融教育について話し合い、個々の意見を発表する。</p> <p>⑤ 今日の授業の振り返りをタブレットのテキストに記述し、提出する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・JICAパラグアイ海外協力隊員考案のおこづかいゲーム</li> <li>・模擬通貨</li> <li>・おこづかいゲーム用ワークシート</li> <li>・タブレット</li> </ul>
4	パラグアイの伝統工芸「ニャンドゥティ」づくりの課題とは？	パラグアイの伝統工芸をつくる職人の話から、正当な対価が受けられていない現状に気付き、生活を向上させるためには何が必要か考え、自分なりの解決方法とその理由を示すことができる。	<p>① 伝統工芸のニャンドゥティについてその概要を知る。</p> <p>② ニャンドゥティづくりの匠のスニルダさんを取り上げ、ニャンドゥティをつくる期間とその対価、担い手不足の現状とその背景について知る。</p> <p>③ めあて「パラグアイの伝統工芸「ニャンドゥティ」の作り手である職人が、適正な対価を得て貧しさから脱するためにはどうしたらよいだろうか？」を確</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師海外研修の現地研修で撮った写真、映像及び資料</li> <li>・伝統工芸のニャンドゥティ</li> <li>・ニャンドゥティの匠スニルダさんの写真と吹き出し</li> <li>・課題解決に向けての手順</li> </ul>

			認する。 ④ 班ごとに分かれ、まず個々の解決策を付箋紙に記述する。 ⑤ 班ごとに出し合った解決策について話し合い、そう考えた理由を学ボードに整理してまとめる。 ⑥ 学ボードを使用しながら全体発表を行う。 ⑦ 今日の授業の振り返りをタブレットのテキストに記述し、提出する。	・学ボード ・水性ペン ・付箋紙 ・タブレット
5 本時	教育を受けること、学ぶことの意義とは？自分事として捉えよう	今までの学習を振り返りながら「 <b>なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？</b> 」の当初の発問について再度捉え直し、自分の明確な考えをもつことができる。	① 今までの授業の内容を時系列に振り返る。 ② 発問：「 <b>なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？</b> 」を再度提示し、確認する。 ③ 班ごとに分かれ、教育の意義として重要なものは何か、まず個々の考えを付箋紙に記述する。 ④ 班ごとに出し合った考えについて話し合い、そう考えた理由を学ボードに整理してまとめる。 ⑤ 学ボードを使用しながら全体発表を行う。 ⑥ 全体発表を踏まえ、改めて自分の考えをタブレットのテキストに記述し、提出する。 ⑦ 今までの学習を通しての振り返りをタブレットのテキストに記述し、提出する。	・教師海外研修の現地研修で撮った写真、映像及び資料 ・課題解決に向けての手順 ・学ボード ・水性ペン ・付箋紙 ・タブレット

## 06 本時の展開（3時間目）

**本時のねらい：**今までの学習を通して、再度教育の意義について考え、「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」の問いに、自分の明確な考えをもつことができる。

過程・時間	○教員の働きかけ・発問および学習活動 ( ) 指導形態	・指導上の留意点 (支援)	資料（教材）
-------	--------------------------------	------------------	--------

<p>導入 (8分)</p>	<p>○今までの授業の内容を時系列に振り返る。(全体)</p> <p>○2校時目に行った発問を再び問いかける。(全体)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」</p> </div> <p>○本時のめあてと学習の手順を伝える。(全体)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ボードと付箋紙を配付する。</li> <li>・座席を班ごとに分ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真や掲示物、実物を見せ、学習内容を想起させやすくする。</li> <li>・授業の流れである「課題解決に向けての手順」を掲示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師海外研修の現地研修で撮った写真、映像及び資料</li> <li>・伝統工芸のニヤンドウティ</li> <li>・ニヤンドウティの匠スニルダさんの写真と吹き出し</li> <li>・課題解決に向けての手順</li> </ul>
<p>展開 (30分)</p>	<p>○付箋紙に自分の考えを記述する。(個別)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・付箋紙1枚につき、1つの考えを記述する。</li> </ul> <p>○書いた付箋紙を学ボードに貼り付け、班で出た意見を確認する。(班)</p> <p>○出た意見をもとに、なぜそう考えたのか理由について話し合う。(班)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水性ペンで線や矢印を引いたり、項目や補足事項、考えた理由を書いたりしながら適宜、学ボードで分類や整理をする。</li> </ul> <p>○班ごとにまとめた意見を発表する(全体)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書くことに悩んでいる児童がいたら、板書や前時のタブレットの振り返り、教室掲示を参考にするよう伝える。</li> <li>・机間巡視しながら、児童から個別に受けた質問に答える。</li> <li>・発表は準備ができた班から順に行うようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学ボード</li> <li>・水性ペン</li> <li>・付箋紙</li> </ul>
<p>まとめ (7分)</p>	<p>○再度発問する。(全体)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの学習と本時の話し合いや全体発表を通して、自分自身の考えをタブレットのテキストに記述し、提出する。(個別)</li> <li>・今までの学習を通しての振り返りをタブレットのテキストに記述し、提出する。(個別)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育の意義について、再度児童一人一人に捉え直させる。これから学習にどのように臨むとよいか考えさせ、自分の考えをもたせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレット</li> </ul>

	○記述した考えや振り返りを共有する。(全体)	・全体共有は時間があれば行う。	
--	------------------------	-----------------	--

## 07 板書計画



**【課題解決に向けての手順】**

- ① 付箋(ふせん)に自分の考えを書く。付箋1枚につき、1つの考えを記入する。
- ② 班ごとに学(まな)ボードに付箋を貼り、班で出た意見を確認する。
- ③ 班で話し合いながら、出た意見を、水性ペンを使いながら分類したり、順番にしたり、必要な補足事項を書き加えたりするなど整理する。
- ④ 班でまとめた意見を発表し、全体で共有する。

## 08 評価規準に基づく本時の評価方法

**【知識・技能】**

・既習事項を基に、教育の意義を見いだすことができる。

**【思考・判断・表現】**

・課題を自分事として捉え、自分の言葉で発言したり記述したりすることができる。

**【関心・意欲・態度】**

・班で協力し、進んで友達と関わりながら学習活動に参加している。

## 09 学校外との連携

にいがた NGO ネットワーク国際教育研究会 RING

・本単元の実践にあたり、単元計画や授業実践の指導案検討で多大な助言をいただいた。

## 10 学びの軌跡

### 【「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」の2校時目の児童の回答】

A 児：将来のためだと思います！

B 児：子どもの生きる力と社会性を高めて、将来しっかりと仕事についても追いつけられないようにするため？生きるために大切なこともあるから。

C 児：なぜ教育をうけるのか？…いい大人になるため？あなたにとって学ぶとは？…将来のため

D 児：社会に出るためにとても大切な事

E 児：将来立派な大人になるため。

### 【「なぜ教育を受けるのか？あなたにとって学ぶとは？」の5校時目（本時）の児童の回答】

A 児：私にとって学ぶ・教育とは、・受けた方が将来に役立つ・まずは自分のために勉強して、それを活かして人を助けることだと思いました。

B 児：私にとって学ぶとは…今日発表したように、知識・人間関係、人のため、将来のため未来のためで、生きていく力を持って知識を付けないと人間関係とか言葉も喋れない、今日みたいな発表もできないと思います。なので、私にとって学ぶとは、これからのこと今のことを考えさせるため。

C 児：将来・未来のためにでもあるし、人のため、お金・学校、知識・人間関係でもある。結論的には、生きるためだと思う。

D 児：自分自身が1人で生きていくためや将来のためにもなるし、自分以外の人を助けるためにもなると思いました。教育を受けることで、教育を受ける楽しさやお金について、海外についても分かるためだと思いました。

E 児：学ぶとは知るだけじゃなくて、教えたり共有できる。

※A～E 児は2校時目、5校時目ともに同一の児童である。原文を掲載。

## 11 海外研修で何を学び、どの部分を見習う生徒に伝えようと思ったか

教師海外研修では、「自分の意識が変わらないと、人も環境も変わらない」という言葉に出逢い、心に深く響いた。この言葉から、物事を「自分事」として捉え、考えることの大切さに気付くことができた。また、研修の中で現地の様々な課題に直面してきたが、その多くは「教育」に起因していると感じた。このことから、「教育の意義」と「自分事として捉え、考えることの重要性」の2つのテーマを併せた実践を考え、授業を通して子どもたちに伝えたいと思った。

## 12 苦労した点

- ・今年度の自分は級外教員で、他学年の理科と書写の授業しか受け持っていないため、実践を行う際、実際に授業をする6学年の学級担任と細部に渡る日程調整を行う必要があった。
- ・パラグアイ研修参加者がチームに自分しかいなかったため、授業実践に向けた授業案作成の段階で、多様な視点からのアイデアをベースにすることが難しかった。
- ・今夏は特に酷暑が続いたため、学校行事の予定が軒並み延期・変更になり、そのための校務分掌にも追われたため、実践日を確定しづらかった。
- ・教育を受けたり学んだりする最終目的は、自分や自分が関わる人たちが幸せになるためだと思うが、子どもたちにこのことを気付かせることに苦労した。

## 13 改善点

- ・子どもたちの個々の考えや振り返りについて、深く掘り下げながら話を聴いたり、意見を出し合ったりする時間があれば、より多くの変容を見られたと思った。
- ・子どもたちに考える時間を与える前に板書でキーワードを書いてしまったため、考えが方向づけられてしまった可能性があった。板書を工夫し、子どもたちに自由な発想で考えさせてもよいと思った。

## 14 成果が出た点

- ・JICAとは何か、どういう組織か、子どもたちは興味関心をもって学び、国際理解や国際協力の素地を育むことができた。
- ・パラグアイの文化や生活について授業で触れることを通して、世界の国に興味関心をもたせることができた。
- ・黒板と学ボード、タブレット端末・ICT機器を交互に併用しながら効率よく授業を行うことができた。
- ・金融教育「おこづかいゲーム」を通して、お金の価値や使い方について考える機会を与えられた。
- ・授業を通じて、他国の課題に関心を持ち、課題解決に向け自分の考えを持ち、他者に伝えることができた。
- ・なぜ自分たちは教育を受けるのか、なぜ学ぶのか、について考える機会を与えられた。

## 15 自由記述

「自分事」をテーマにパラグアイ、ザンビア双方のメンバーが集まってチームを結成し、授業実践計画を考えてきた。パラグアイからのメンバーは自分一人であったが、チームの人達は親身になって協力してくださり、本時の授業実践にも遠方から駆け付けていただいたことは誠に感謝の念に堪えない。教師海外研修で得た、人とのつながりは、私にとってかけがえのない財産になった。

今年度の教師海外研修では、参加者はパラグアイ、ザンビア両国で様々な課題に直面し、その原因について考え、学び、そして多くの課題は教育の不足・欠如にあると結論付けた。この経験をそれぞれの学校で子どもたちに直接伝え、彼らの人生における視野を微力ながら広げることができたことは教師冥利に尽きる。

本研修で得たたくさんのことを、今後も授業を通して子どもたちに還元し、よりよい社会の実現に向けて貢献していきたい。

## 参考資料

- ・JICA国際協力機構ホームページ
- ・今年度のJICA教師海外研修パラグアイ現地研修時、JICA海外協力隊パラグアイ派遣隊員が、第8065サン・エンリケ・デ・オソ小学校の児童を対象に授業実践した「おこづかいゲーム」による金融教育

# 8

## 授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解教育セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

### ■ 埼玉県

#### イベント名

#### グローバルセミナー 2024 「世界に目を向けた多文化共生の まちづくりを進めよう！」

日時 2月4日（日）10:00～16:45

場所 コーププラザ浦和

主催 特定非営利活動法人 埼玉 NGO ネットワーク、JICA 東京

プログラム 教師海外研修報告会、基調発題&わくわくワークショップ



### ■ 新潟県

#### イベント名

#### 第41回 RING セミナー 「繋がろう！あなたと世界」

日時 2月10日（土）13:00～16:30

場所 ほんぽーと新潟市立中央図書館  
（オンライン配信あり）

主催 にいがた NGO ネットワーク、JICA 東京

プログラム 教師海外研修報告会、JICA 教材体験ワークショップ



### ■ 群馬県

#### イベント名

#### ぐんまグローバルセミナー 2023

日時 2月17日（土）13:00～17:00

場所 G メッセ群馬

主催 群馬県国際理解教育研究会、  
（公財）群馬県観光物産国際協会、JICA 東京

プログラム 教師海外研修報告会、日本人学校帰国教師実践報告会





## ■ 千葉県

イベント名

### 国際理解セミナー

日時 2月23日（金・祝日）  
13:30～16:00

場所 千葉市文化センター

主催 （公財）ちば国際コンベンションビューロー、JICA 東京

プログラム 「パプアニューギニア」ってどんな国？、教師海外研修報告会



## ■ 東京都

イベント名

### 知ろう！体験しよう！ 教師海外研修報告＆ 世界に出会うワークショップ会

日時 2月25日（日）10:30～16:30

場所 JICA 東京センター

主催 JICA 東京

プログラム 教師海外研修報告会、ワークショップ



## ■ 長野県

イベント名

### 2023 年度 長野教師海外研修報告会

日時 3月3日（日）13:00～15:20

場所 オンライン（Zoom）

主催 JICA 東京

プログラム 教師海外研修報告会、座談会



# 9

## 総括研修 2月18日(日)

### 目的

参加者全体で実践内容を共有・考察することで、よりよい実践ができるようにする。

時間	プログラム	講師・進行
10:00	開会あいさつ、プログラム説明	JICA 東京
10:05	午前のねらいと進め方説明	国立教育政策研究所 白水 始 先生
10:20	<b>【ラウンドテーブル】</b> 代表授業の報告★ 5グループに分かれ、授業チームの代表実践者の報告を他チームメンバーが聞き、ディスカッション	
11:40	午後のねらいと進め方説明	国立教育政策研究所 白水 始 先生
12:00	授業チームごとに ・午前中のラウンドテーブルの内容共有 ・次年度の参加者に向けてポスター作製 -自分たちのテーマで授業をする時の手応えと課題 -他のテーマでも共通する、本研修での手応えと課題、課題を乗り越えるためのアイデア	
13:40	<b>【クロストーク】</b> ★ ポスターを使って成果と課題、課題の乗り越え方を共有 次の授業に向けたディスカッション	国立教育政策研究所 白水 始 先生 教育環境デザイン研究所 畑 文子 先生
15:10	振り返りの共有・講評 参加者より自身の変容について一言ずつ	東京都市大学 佐藤 真久 先生
15:45	修了証書授与	
16:00	閉会	JICA 東京

## ★ラウンドテーブル

まずは他のチームの授業計画を聞き、子ども達にどんな学びがあるのか予想。その後、実際の教室での発言や学びの軌跡、難しかったところ、うまくいったところ等を共有しました。



## ★クロストーク

自分のチームの授業実践について、成果や課題をまとめ、更に他のテーマで授業を実践するときにも共通する成果と課題、課題を乗り越えるためのアイデアを共有しました。

このレガシーは翌年度の研修参加者にも共有します！



## 集合写真

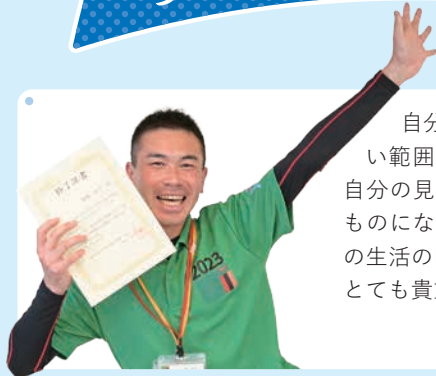
最後の全体研修を終えて、アドバイザーの先生達と！



# 10

## 研修参加者より

### 子ども達に伝えたい!!



自分たちの生活がいかに小さく狭い範囲のことであるかということ。自分の見方・考え方がいかに限られたものになっているかということ。自分の生活の中で生まれる「モヤモヤ」は、とても貴重なものであるということ。

梅村 唯斗

#### [ザンビア チーム]



国際協力について私たちができることって何だろう？いつもは寄付や古着を集めて送ることかな、と思っていたけれど、今は、「弱い人のことを考え続ける」ことなのでは、と思っています。

遠藤 大輔

世界の様々な課題について、どのように行動すれば良いか大人も答えは分かっていません。「途上国はこうだ」「〇〇という国はかわいそうだ」ではなく、答えのない問題を一緒に考えていきましょう。

岡田 紘明

様々な世界の出来事に目を向け、世界と自分は繋がっていることを深く理解することが大切。そして、未来を世界中の人と共に築いていく自覚をもち、自分にできることを考え、実行してほしいと思います。

岡野 有為



世界にも日本にもは食べるものがなくて苦しんでいる人がいる、そんな人達のために何ができるか考えよう。一つの方法は「世界のこと・世界の食料のことを知ろう」とし、得た知識を他の人にも伝える」ということだ。

五ノ井 ゆかり

乳製品を売るときには利益が出るように考えたり、色々な人と話すために語学が求められたり、日常の様々な場面で学習が必要だと感じました。いま、みなさんは何のために勉強していますか？学ぶことで、自分の生きる道がきっと広がります。なりたい自分になるために、習得したい学びを得てください。

澤野 裕香



- ・まずは何事も現状を知ることが大切。そのうえで自分たちがやるべきこと・できることを考えていく。
- ・国や人同士の優劣はない！
- ・ジブンゴトとして考えること。
- ・価値観・見方が異なる相手を否定せず理解すること。

玉井 彩郁

“一歩踏み出そう！”

情報があふれ、ちょっと検索したら分かったような気になっていませんか？かく言う、私がそうでした。ホンモノを見て、聞いて、肌で実感したことで、何も分かっていないことに気づかされました。

中村 太郎

私は「国際教育に興味がある。」ということの日頃から様々な先生に話している。すると、このことが関係するところに伝播し、令和5年度JICA教師海外研修に誘ってもらい、派遣の決定をいただいた。日頃から自分がやりたいことを色々な人に伝えておくことの大切さを改めて感じた。世の中は人と人の縁で成り立っている。やりたいことは常に公言し、自分の心に正直に生きていくことが大事だと思う。

藤井 美奈子

日本に住んでいるけれど世界のこと地球のことを意識してもらいたい。ただ生まれた場所が違うだけ。その意識をもって世界のことに関心を持ち、「私だったら」の視点で考えることができるようになってもらいたい。

水野 修



イノベーションは遊びから始まる。大いに遊び、大いに学んでほしい。私たちは新しい世界を一緒に作っていく仲間です。新時代のアイデアで誰一人取り残さない世界を一緒に目指しましょう！

宮田 千尋

将来私たちは、国内に限らず海外のさまざまな人々とともに働いていくのだから、言語や考え方、気持ちの持ち方においても、もっといろんな人とつながる準備をしなければならないということ。

渡邊 千恵

### [パラグアイ チーム]



自分の周りには様々な人がいます。自分の思う「当たり前」が世界の常識とは限りません。自分が接する人を、属性などの外側だけで判断するのではなく、その人自身の考えなどの内側を知ろうとしてほしいと思います。

有本 眞実

自分と世界はつながっている。今の私を大事にしながら自分と世界をいききして、10年後、20年後の世界をイメージしてほしい。

植木 凡子

世界には、様々な境遇の人達がいるけれど、どこで生まれて、どのように育ち、どんな立場にいたとしても、それぞれの個性や生き方を大切にしてほしいということ。

大平 要

国際社会を生きていく上で、自分とは違った文化や考え方を持つ他者のことを理解し、違いを認め、尊重する気持ちを育んでほしい。そして積極的に他者と関わり、自分の世界を広げてほしい。

大日方 あずみ



児童と共有できたことは、わずかですが、周囲の環境を地球規模で見ると、国籍、性別問わず、共通の良さや課題が見えてきます。これらを同じ地球に生きる仲間、パートナーとして見つめられるようになってほしいです。

笠原 香織

私が、この研修を通して改めて感じたことは、「現地に行き、自分の目で見て、聞いて、感じて、人と話すこと」の大切さです。テレビやインターネットの加工された情報ではなく本物に出会うことでしか、学べないと感じました。

下井 慈



地球の裏側に『日本から一番遠くて親（ちかし）い国』パラグアイ共和国がある。海外移住や日系社会を自分事として捉えた場合、どのように行動するかを考えてもらいたい。

富澤 喜一

「百聞は一見に如かず」。AIやICTが発達して誰もがすぐに同じ答えが得られる時代だからこそ、自分で直接現地に行き、五感をフル活用しながら実際に体験することで得られたものに大きな価値があるのです。

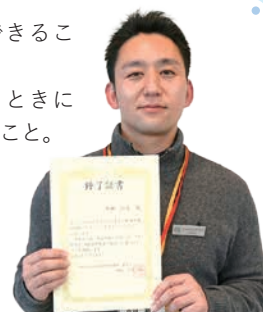
水澤 真也

パラグアイの課題を解決しようと活動している人がいます。この一文だけで色々な切り取り方ができます。パラグアイの課題はパラグアイだけのもの？日本にはその課題はないの？とか、課題を解決する人ってすごい人なの？頭が良くて、お金があって、何でもできる人なの？など、生徒たちが先入観を持ってしまっていることに関して、私が見てきた真実を示したいです。

森岡 浩希

- ・体験することによって理解できることがあるということ。
- ・外国の地でも、人とかがかわるときに大切なことは変わらないということ。
- ・当たり前だと思っていることは、違う視点から見れば当たり前とはならないこと。

吉田 裕文



## 先生達に伝えたい!!

### [ザンビア チーム]



この研修は3つの点ですばらしい研修である。①自分の価値観を良い意味でぶっ壊すことができる。②同じ志をもつかけがえのない仲間を見つけることができる。③「教師としてもっと成長していこう」と思える。

梅村 唯斗

ザンビアへ行き、モノや教育の機会が不十分であること=不幸せ、ではないことに気づきました。反面、自分が教える生徒たちは…。何のために学ぶのか、常に心に持っていないとだめだな、と思うようになりました。

遠藤 大輔



どんなこともクリッカー一つで分かった気になる現代で実際に自分の目で見て自分の肌で感じてくることの大切さを学びました。机上の空論で終わらないためにも実際に足を運んで見て欲しいです。

岡田 紘明

「よりよい未来」について子どもに考えてもらうためには、教師自らが心動かされるような体験をしたり、そのような情報に敏感でいることが重要だと感じました。

岡野 有為



学校は、生徒を就職させたり長く勤められるように教育する実利面だけでなく、求めて勉強する楽しさ、美しいものを美しいと感じる喜び、自分の文化と違うことを学ぶ驚きということも大切に思う。

五ノ井 ゆかり

SDGsが掲げる世界共通の課題は、CBDR (Common but differentiated responsibilities) と聞きました。例えば児童労働は、日本の価格競争と関連しているかもしれません。先進国に住むわたしたちは教育者として、子どもたちに何を教えることができるのでしょうか。

澤野 裕香

研修内容・研修中に感じたもやもや感を共有したいです。

教科横断型の授業をつくることで、様々な教科でザンビアの文化を学んだり、課題解決に向けてできることを考えたりすることができるということ。

玉井 彩郁

“どんな先生になりたいですか?”

今回の海外研修で出会ったパワーあふれる方々(現地の人、JICAスタッフ、先生)との交流は、「挑戦し続ける」という当初の気持ち呼び起こしてくれました。つながりは宝です。

中村 太郎



1週間の海外研修は、非常に充実し、学び多き日々であった。渡航前からの授業構想、渡航後の授業作り、授業実践と3カ月以上に及ぶ研究は大変であるが、なかなかそのような機会がないと本気になれないので、チーム代表者として研究の機会を与えてもらったことにも感謝している。実際、8月以降は地道な研究を自分で進めていくことになるが、授業作りで悩んだときのアドバイスや、授業実践の報告書などが多々あった。また、在籍校においても、1人の教員が、真剣に研究していく姿は、同僚やその授業を受ける子どもたちにとって、よい刺激になっていたようである。

藤井 美奈子

教海研に参加することによって同じ志を持つ仲間と知り合えたことが大きく、刺激的であった。そして、現地での経験を仲間同士で語り合うことによって、自分自身になかった視点を獲得の機会となり、それが財産となった。

水野 修



公務は確かにやる事が多く忙しい。それでも私たちが広い視野で学ぶことが児童生徒の未来を生きる力を育てることにつながっている。世界は未来に向かって変わっていく。現状維持は退化と同じ。一緒に進みましょう！

宮田 千尋

学校は生徒を守る場所でありつつ、外へ開かれていなければならない。忙しさを口実にせずに生徒に豊かな思考をする機会を工夫するべきだし、それを楽める力を、もっと私たちは身につけるべきだということ。

渡邊 千恵



[パラグアイ チーム]

「外国は遠くて…」→海外出身の方は身近に多くいらっしゃいます！「外国語話せないし…」→話せなくても大丈夫！興味をもつことが大きな一歩です！皆と一緒に、世界のこと、日本の未来を考えていきましょう。

有本 眞実

自分のえがいていたイメージと現実との「ずれ」や「違和感」を確認する。そのために自己の振り返りや、一緒に対話できる仲間の存在がとても大切だと感じた。

植木 凡子

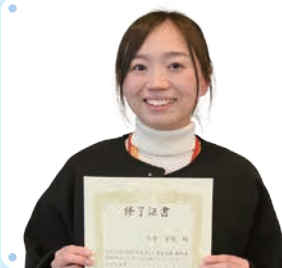


外国の話、となると言語や文化、興味の有無が壁になってしまいが、世界はもっと身近で、少し視野を広げるだけで子供達へたくさんの学びを提供できる。まずは身近な異文化（教員や生徒、地域等）とぜひ交流してほしい。

大平 要

周りの先生にもぜひこの研修に参加してもらいたい。小学生にとって担任の先生は社会へと繋がる大きな窓口なので、「僕たちの先生」が外国とのつながりを持つことは深く心に残り、子どもたちも外国や世界に目を向けるきっかけになると思う。

大日方 あずみ



未来は、今後さらに複雑化していくと思います。子どもたちの幸せな未来のためにも、世界に目を向けて、地球規模で課題を見つめていくことが大切だと思います。ぜひ、JICAの取組を日々の実践に生かしてみてください。

笠原 香織

「私たち教師自身が教材」ということが、よく言われます。私たち自身が様々な人と関わり、多様性を楽しみ、学び続けることが、子どもたちの教育にとって欠かせないと思います。その意味でJICAの研修は絶好の機会です。

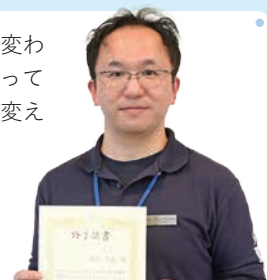
下井 慈

途上国に直接行くことで、自分の五感を使って生の情報を味わうことの素晴らしさ。また、一緒に同行した教員同士のつながりが、相乗効果となって生まれる“熱い気持ち”も本当に大きな宝物になった。

富澤 喜一

「自分の意識が変わらないと、人も環境も変わらない」。まず、教師である我々から変わっていきましょう。すぐに変えられなくても、「変えていこう！」とする前向きな姿勢をもつことが変化の原動力になります。

水澤 真也



教科指導はとても重要でおろそかにすることはできませんが、JICA が世界中で行っている国際協力には、教科の指導に繋がられる活動がたくさんあります。貧困地区にある音楽学校、障害者施設、伝統工芸のリブランディング、日系人移住者の農業を基盤とした街の開墾など、教科指導に落とし込むこともできますし、教科を横断して取り組むことができるネタの宝庫です。自身の教科指導の幅と深さを広げることができるとても貴重な経験を得られます。

森岡 浩希

日本とは異なる環境の中で、現地の言葉を使いこなし、現地の人たちに誠心誠意向き合い、生活や社会の質を向上させようと努めている青年海外協力隊員や、隊員を支えるJICA事務所所員がいること

吉田 裕文





【パラグアイ チーム】



国際協力は「してあげる」ことだと思っていた。しかし、支援の周りの「知る」「考える」「一緒に変わる」などの協力方法に気付いた。大それた事ではなく「今この場からできること」について考えられるようになった。

有本 眞実

その国の人にしかわからない価値観をそのまま受けとめることや、先入観というフレームを外して「個」として人を見ることの難しさや大切さを知った。

植木 凡子



物事をカテゴリ化してしまいがちだったが、カテゴリ化してみてもよいことと、その枠を取り払って見た方がよいことを意識するようになった。また、日本の音楽について学びたいという意識が高まった。

大平 要

研修以前は、今ある環境がベストだと新しくコミュニティーを広げようとは思わなかったが、先生方やJICAスタッフの方、パラグアイでの出会いを経て、多くの人と関わり様々な考えを知ることの楽しさを感じた。

大日方 あずみ

他国籍の方々との共生を捉えるときに、どこかバックグラウンドを気にし過ぎていた自分がいました。国籍、性別等のカテゴリーに囚われず、個々が互いのアイデンティティを受け止め合える関係が大切だと気づきました。

笠原 香織

教科横断的学び、カリキュラムマネジメントといった言葉が少しずつ理解できるようになってきました。教科で分断するのではなく、教科担任が連携し、協力し合って「新しい授業づくり」をしていきたいという思いが強くなりました。

下井 慈



パラグアイでは貧困問題と就労、教育、治安など様々な問題が絡み合っていることを感じた。日本に帰国後、「当たり前は当たり前ではない」こと、「謙虚さ」「感謝」を一人でも多くの人に伝えたいと考えようになった。

富澤 喜一

物事を広く俯瞰しながら捉え、多角的に考えようとする意識をもつことができたことや、世界の様々な課題を「自分事」として捉え、解決に向け、自分にできることから始めようとする意欲が高まったことです。

水澤 真也



〇〇人という分類になんとか違和感を感じていて、自分も含めて日本人は日本人であることの意識が大変強いということに気づきました。これは良い面も悪い面も両方あると考えます。良い点としては、日本の文化や伝統を大切にし、日本人が日本人であることを誇りに思えることです。悪い面としては日本人以外の人々も国籍で分類してしまう点です。ひとりひとりに目を向けにくくなってしまっています。各国の文化や伝統は大事にしつつ、人間ひとりひとりを見る際にはルーツや背景ではなくその人の今に目を向けるべきだと気づきました。

森岡 浩希

青年海外協力隊の方々から、一つのプロジェクトを進めたり、成し遂げたりするためには、様々な立場の人の理解や協力を得る必要があるということを教えていただいた。自分もそのような行動がとれるよう心掛けている。

吉田 裕文

# 11

## 研修を終えて

JICA 東京 学校教育アドバイザー 諸橋 郁哉（埼玉県教育委員会より派遣）

4年ぶりの教師海外研修は、本来あるべき姿の「海外」を取り戻しました。海外はおろか、日本国内でさえも行動が制限された中で、それでも「学びを止めない」という強い信念を持ちながら、試行錯誤をしてきた3年間の国内研修の経験も活かし、さらに充実した内容の研修となりました。実際に開発途上国の現場へ出向き、自分の目や耳だけではなく五感すべてで感じ取ることは、この教師海外研修にとって唯一無二の存在であることを再認識することができました。

日本社会のグローバル化は、我々の社会に多様性をもたらし、そのひとつの要因が日本で暮らす外国人の増加であることは明らかです。つまりそれは、教室の中に外国につながる児童生徒が増加していることにつながります。これは、教育現場にも大きな変化をもたらしています。

日本と海外の接点がより身近になる中、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつあります。このような社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、どのような教育が「この時代」に求められているのかを考えたとき、まずは自分の国のことを知り、そのあとで他国への理解を深め、世界規模で物事を考えられるようにする教育、グローバル化する世界に適應できる人間を育てる教育、そして地球規模の課題を解決する人材育成のための教育であり、決して日本だけで起きているという視点ではなく、海外とのつながりも重視した日本をとおして海外を見る視点が重要となります。

不確実で複雑、不透明で曖昧な社会情勢を「VUCA時代」と言われていますが、学校を、そのような変化する社会の中に位置付け、児童生徒には自ら変革する姿勢や行動が必要不可欠であり、つまりそれは、今までのような「その都度、変化する社会や経済に対応する力を育むという受け身的な姿勢」ではなく、「あるべき社会を創り上げる能動的な姿勢や能力」を育む学校教育が必要であることを意味します。現在と未来に向けて、新しい時代を生きる児童生徒に、学校教育は何を準備しなければならないのか。このような困難な状況だからこそ、従来の学校教育の中だけで完結するのではなく外部と連携した児童生徒への学びの提供を進めていった先生方に敬意を表しますとともに、先生方を研修に快く送り出し、公開授業にも多大なるご協力をいただいた各所属校の校長先生をはじめ、ご関係の先生方に改めて感謝申し上げます。

今後は学校、地域の中での推進者となる先生方として、大きく二点、触れたいと思います。

一点目は、教育実践という視点についてです。この研修は「海外」が重要なピースのひとつではありますが、いわゆる「びっくり体験記」を児童生徒に伝えることが目的ではありません。実際の開発途上国の現場で、自分の目や耳だけではなく五感すべてで感じ取ったことをとおして、授業の「ねらい」を明確にすることが大切です。この先生だから、この教科だからできるということではなく、児童生徒の未来の姿を想像しての授業づくりを、お互いに意見を出し合いながら改めて考える機会となりました。

二点目は、理解促進という視点についてです。この研修はそれぞれの「想い」に応えられるような研修デザインを心掛けました。ただし、それぞれの興味関心だけで推し進めても、想いは中々伝わらないと思います。「いいね！」と周りから共感してもらえることで、少しずつ理解が進み仲間が増えていきます。ネットワークを構築し、決して孤軍奮闘するものではないと気付く機会となりました。

私自身、教師海外研修に携わらせていただいたことで、かけがえのない体験をし、多くのことを学ばせていただきました。

新しい時代の学校教育のあるべき姿を想像し、豊かな研修を企画実施された JICA 東京開発教育担当の皆様、研修にご協力いただきました皆様、研修に参加された先生方、指導助言をいただきました佐藤真久先生、白水始先生、畑文子先生に心から感謝申し上げます。

# 12 JICA開発教育教材案内

## JICA 開発教育教材一覧

子どもたちが世界の現状や課題、国際協力などについて知り、考え、自分たちにできることを探すために役立つ開発教育・国際理解教育のための JICA 教材をご紹介します。HP からダウンロードしたり、ものによってはご提供するなど、無料で活用いただけます。詳しくは、各ホームページをご覧ください。

### 地球ひろば

<https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/index.html>



#### SDGs（持続可能な開発目標）を学べる教材



カード、すごろく、実践集など、授業に活用できる教材やヒントがたくさん！



#### SDGsを学ぼう、SDGsで学ぼう！



JICA地球ひろば作成のSDGs関連教材を1冊にまとめた教材ガイドブック（DVD付）。



#### 授業で使えるショート映像集



授業でそのまま活用できるアクティブラーニング用の映像教材です。



#### 「共につくる 私たちの未来」



SDGsの基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介も交えて学べます。



#### つながる世界と日本



途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。



#### JICAで学ぶ世界の課題－JICA広報誌を活用して－



「水」「栄養」「DX」の3テーマについて、JICA広報誌を授業でも活用しやすいパワーポイント教材にまとめました。活用の手引きもあります。



#### 国際理解教育実践資料集



学習のポイントや内容等を分かりやすく解説する員用ページと、コピーして配れる生徒向けページがあります。SDGsワークも複数掲載しています。



#### 学校に行きたい！



学校に行きたいけど行けない開発途上国の子どもたちの問題を知り、国際協力について考えることができるパンフレットです。



## ぼくら地球調査隊（漫画で学ぶ、地球規模の課題）



16,000校の小・中学校で掲載された「産経ペイドパブリシティ（通称：壁新聞）」をマンガ教材にしました。環境、教育、食料、水、保健医療の5テーマあります。



## 生まれ！地球の教室



世界の様々な地域や課題について、クイズやワークシートを使って子どもたちにも分かりやすく説明しています。



## JICAの仕事



中学生や高校生向けに、JICA／国際協力の仕事内容を分かりやすく紹介しているパンフレットです。



## 栄養ワークショップ教材 買い物ゲームで学ぶ



世界の栄養問題に対する意識を高めていただけるよう、楽しみながら世界の栄養問題が学べる「買い物ゲーム教材」です。



## JICA 東京センター オリジナル教材

JICAは全国に15の拠点を持ち、国際理解に関わる教員研修や、途上国からの研修員受入れ、市民の皆さまが国際協力を知り、一歩近づくためのプログラム等実施していますが、東京センターは東京・埼玉・千葉・群馬・新潟・長野を管轄する国内最大の拠点です。皆さまに国際協力を伝える活動の一つに、国際協力関係者の協力を得て作成したオリジナル教材があります。

その中でも特に人気の四つを紹介します。他のものは以下サイトをご覧ください。

明日の授業に使えるネタに出会えるかも！？

<https://www.jica.go.jp/Resource/tokyo/enterprise/kaihatsu/material/index.html>



## 総合的な学習（探究）の時間のアイデア集



総合の時間で、国際理解教育／開発教育／ESDをどう進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。



## 世界の教室から



JICA海外協力隊として世界中のさまざまな「教室」で活動してきた隊員の皆さんからよせられた写真とメッセージが掲載されています。



## 逆さ地図（※）



見慣れている世界地図、いつもと違う視点で逆さから見てみると、何か新しい発見があるかも...

## モノはどこからきているの？カードゲーム（※）

途上国との相互依存を楽しく実感できる教材です。（貸し出しのみとなります。）



※ダウンロード可能なデータがないため、ご希望の場合は下記HP内「送付・貸し出しを希望する場合」をご一読の上、メールにてお申込みください。（その他教材も掲載しています）

# おわりに

2020年度から2022年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受けて海外研修を中止せざるを得ない状況でした。2023年度は、4年ぶりに海外研修を再開し、多くの志高い現職教師とともに、ザンビア国、パラグアイ国への派遣研修を組み入れた1年間のプログラムを実施することができました。グローバル感染症は、私たちの生活に多大な影響をもたらしたものの、その一方で私たちに大きな経験と学びをもたらしました。新しい感染症の頻度が高まっているのは、森林伐採などで動物の生態が変わり、途上国における人口増加と都市への人口集中による人間居住の過密化、動物と人間の接点が増えていることが遠因だと言われています。さらには、経済のグローバル化が進むことで、国を超えた人の往来がこの感染拡大を助長させました。このグローバル感染症と、気候変動、高齢化、エネルギー問題などに共通して言えることは、多くの要因が複雑にからまった“複雑な問題”であるということです。そして、地球環境問題、貧困・社会的排除問題、人間居住、グローバルな経済、健康などの多くの問題が相互に作用しながら深刻化してきており、先進国と途上国の相互作用も深まりつつ、国の文脈を超えたグローバルな視座・視点で捉えることがますます重要となってきました。

このような状況のなかで、本年度は、グローバルな視座・視点を養うために、地域、校種、派遣国を超えた参加教員の議論を通して、[多様性]、[ジブンゴト（自分ごと化）]、[パートナーシップ（協働）]、[ハピネス（幸せ）]、[文化]を横断的テーマとした混成チームを編成しました。さらには、持続可能な開発のための教育（ESD）で指摘されている4つのレンズを通して、さまざまな課題・資源・時間・空間・人をつなげる統合的レンズ（つながり・かかわり）、身近な文脈（歴史や地域）で深め、世界の文脈に広げる文脈的レンズ（広がり・ふかまり）、課題の再設定や捉え直し、意味づけ、問いを重視する批判的レンズ（捉え直し、意味づけ）、社会が変わる・変える、個人が変わることを連関させた変容的レンズ（個人の変容、社会の変容）を活かすことにより、今日までの教育実践を新たな次元で捉え直すものでした。

幸いにも、今年度実施された、ザンビア国、パラグアイ国への派遣経験もさることながら、関係する団体や学校の協力を受けることができただけでなく、2022年度に増して相互に議論をする時間を増やしたことにより、大変充実した研修となりました。地域・校種・派遣国を超えた横断的テーマに基づく混成チームは、帰国後の授業づくりについても議論をし合い、授業実践にも互いに参加することを通して、学び合いを継続しました。新学習指導要領では、「持続可能な社会」という用語が多々明記されているだけでなく、「何ができるか」や「知っていること・できることをどう使うか」といった資質・能力の重視、主体的・対話的で深い学びやカリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程について強調がなされています。近年のグローバル化の時代、これからの地球市民性と混成文化の時代、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代において、本研修プログラムに参画された教員自身がこの経験を活かし、想い先行・びっくり体験報告に終わらない取組として、同僚の教員らや地域の方々とともに、新たな次元で、学校教育活動の充実に役立てていただけることを切に願う次第です。

2023年度教師海外研修アドバイザー

東京都市大学大学院 環境情報学研究科  
教授 佐藤 真久

